

デンソーグループ
フラガールが残した

8年の足跡

デンソースピリット、私たちなりのカタチ

D E N S O
G R O U P
H U L A
G I R L

DENSO

世界を見つめ、未来を見つめる。

自然を愛し、社会とともに生きる。

変化を恐れず、挑戦を楽しむ。

個性を尊重し、協力し、技術を高める。

デンソーが培ってきた、モノづくりの魂を、

これからもこれまで以上に大切にし、

新しい価値や、これからのコアになるものを

次々に創造していく。

よりよい未来を次世代に届けるために、

私たちは行動します。

———
で実際、どうする？



デンソーグループ
フラガールが残した
8年の足跡



デンソーグループフラガール。

関係者には耳に馴染んだこの言葉。でも、まったく事情を知らない人が聞いたら「いったい何のことだ？」と首をかしげることでしょう。

「デンソーグループ」とは、愛知県刈谷市に本社をかまえる自動車部品メーカー「株式会社デンソー」を中心とし、単体で約四万五〇〇〇人、グループでは約一七万人の従業員を抱える巨大企業群のことを指します。本書を執筆する社会貢献推進課は、この会社の総務部ソーシャルリレーシヨン室に所属しています。

一方、後半の「フラガール」はハワイの伝統舞踊「フラダンス」を踊る女性たちのことを指します。さらに多くの人にとっては、松雪泰子さんや蒼井優さんが出演した映画『フラガール』であり、その舞台となった福島県いわき市の「スパリゾートハワイアンズ」（旧常磐ハワイアンセンター）を思い起こさせる言葉でしょう。

デンソーグループフラガールは、この二つが奇跡の融合を果たした言葉なのです。

だがしかし……。工場と南国の踊り、理系と文系、理論と感情、探求心といやし、科学技術とエンターテイメント、あるいは仕事と余暇――。

「デンソーグループ」と「フラダンス」がもつイメージは相いれませんが、実際、両者は十年前まで縁もゆかりもない存在でした。ところが今、二つは分かちがたくつながっています。どのように、二つは出合い、混じり合うことができたのか。

発端はあの忌まわしい大災害でした。

二〇一一年三月一日。

日本人にとって、この日は忘れてたくても忘れられない特別な日です。

午後二時四六分のことでした。三陸沖の太平洋を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生しました。日本観測史上最大規模のマグニチュード九・〇以上という巨大地震は、最大震度七というおそろべき揺れだけでなく、巨大津波と度重なる余震、そして福島第一原子力発電所事故という深刻な二次災害を引き起こしました。現在はこれらの災害を総称して、東日本大震災と呼ばれています。

震源地から五〇〇キロ以上離れたデンソー本社でも大きな揺れを感じました。デンソーグループは国内だけで約六万人の従業員を抱え、東北や関東にも拠点があります。企業の責任として、まずは従業員と家族の安否を確認しなければなりません。地震の一時間後には社内には災害対策本部を設置し、その情報収集に当たりました。さらに企業には事業に対する責任があります。とくにメーカーとして製品の供給を円滑に行う責務があります。そのため、自社の建屋や設備、在庫

だけでなく、部品材料メーカーなど関連企業の被災状況を確かめ、供給難を最低限に抑えるための作業が連日連続行われました。さらに震災翌日からは備蓄物資を宮城県、福島県、山形県の関連会社に発送。並行して、社員らに被災地へ送る日用品など支援品の提供を呼びかけました。支援品は工場や拠点ごとに集められ、通常業務の合間に有志によって仕分けられました。国内外から集まった段ボール箱約五〇〇〇箱分の支援品、グループ企業による義援金の二億円、社員らからの寄付で集まった七二〇〇万円が、随時被災地へ送られました。

また当時、デンソーは福島県田村市に新工場を建設中でした。工事を終え、行政による最終検査中に、この大地震に見舞われましたが、生産設備を設置する前だったことが幸いし、大きな損壊はありませんでした。震災の翌日、田村市の富塚宥暲市長から当社の災害対策本部に連絡が入ります。福島原子力発電所一号機が水素爆発を起こし、近隣住民を緊急避難させなければならぬ。については新工場の敷地を貸してほしい、というのです。電話を受けた社員が上長へ確認する旨を伝えて電話を切ろうとしたところ、偶然その場を通りかかった土屋総二郎専務（当時）が敷地だけでなく建物も提供することを即決。その夜、デンソーグループは一二名の救援隊を結成し、設営準備のために現地へ出発。事故発生から二日後の一四日には約二〇〇〇人の避難者を受け入れました。

しかし、被害の様子が明らかになっていくと、被災地の復興は容易ならぬ難事業であることがわかってきました。三月三十一日に視察のため現地を訪れた加藤宣明社長（当時）は翌日、全社員へ向けて次のメッセージを発信します。

「……今回の震災は、国家レベルの危機であり、先の見通せないことも多くあります。しかし、このような時こそ、社員一人ひとりが当事者意識を持って、『今、何ができるのか』をしっかり考え、全社一丸となって行動を起こすことが必要です。

総智総力を結集して、ともにこの難局を乗り越えていきましょう。」

デンソーは「世界と未来をみつめ／新しい価値の創造を通じて／人々の幸福に貢献する」という企業理念を掲げています。では、災害支援において「未来をみつめる」とは何でしょうか。それは「継続」に他なりません。

ちょうど支援も、食料や住まいの確保といった初期活動から、真の復興を目指した次のステージへと移らなければならぬタイミングでした。そこでグループ内のリソースを検討した結果、導き出されたのが継続的な「人的支援」でした。復興支援活動を会社の業務と位置づけ、社員から希望者を募って組織的に現地へ派遣するのです。

このプランはデンソーの基本理念を支える「先進」「信頼」「総智・総力」というデンソースピリットの本質を突いていると社内でも多くの共感を呼び、二百数十名の社員が活動への参加を志願しました。総務部と人事部が連携してプランの枠組みを決め、いまだ混乱する被災地との調整等に奔走。二〇一一年四月一七日には第一陣を派遣します。以降、八月五日まで七四日間、計一六陣の派遣が行われ、六七四人が復興作業に当たりました。

こうした一連の活動は、デンソーグループの社員に、自分たちの会社の存在意義を改めて確か

めさせるきっかけとなりました。

その昔、企業の社会貢献とは雇用を生み出し、利益をあげ、より多くの税金を払うことだと考えられていました。しかし今や、それだけでは足りません。よき企業市民として社会貢献活動を推進し、企業の枠を越えて信頼と共感を得ることが求められるのです。

「もっと自分たちにできることはないか」

東日本大震災の支援活動が進むにつれ、多くの社員がそう考えました。

直接支援活動に参加したのはごく一部です。その他の社員にこそろざしがなかったのではありません。さまざまな理由から直接活動に参加したいという希望が叶わなかった者が大勢いたという解釈が正しいでしょう。総務部ソーシャルリレーション室 社会貢献推進課に勤務し、支援品の集配や募金活動に携わっていた大海^{おほい}留美^{るみ}もその一人でした。

大海は社員を被災地へ派遣するプランが発表された時、

「自分も関わりたい」

と願いました。

彼女は、愛知県刈谷市のデンソー本社で大地震に遭遇しました。地震発生と同時にデスクの下に避難したほど大きな揺れでしたが、その時は大した被害はありませんでした。ところが、震源地は五〇〇キロ以上離れた東北地方だというではありませんか。

「これはいへんなことが起きている」

彼女は二日前まで東京へ出張していました。都心部では地震による多くの帰宅困難者が発生しているとテレビが報道しています。彼女はまるで自分が被災したかのように、恐怖とともにニュースを見続けました。安全な愛知県にいてもかわらず、すべてが他人事には思えませんでした。

しかし、被災直後の支援活動はがれき撤去などの力仕事はほとんどです。会社がコーデイネーターとしたといっても、いったん現場に飛び込めば、食事や休息も通常どおりにはいきません。体力に自信がなければ逆に足手まといです。大海は仕方なく参加を断念し、後方支援に力を注ぐことにしました。それでも、心の片隅で、

「もっと私にできることはないか」

という思いを、抱き続けていたのです。

東日本大震災から半年後の一〇月、大海は、大ヒット映画『フラガール』の舞台となったスパリゾートハワイアンズのダンサーたちが、復興への願いを込めて全国一二四か所で「フラガール全国きずなキャラバン」と銘打った公演を行い、その苦難と笑顔とが『がんばっぺ フラガール!』というドキュメンタリー映画にまとめられて、劇場公開されたことを知りました。

その頃、大海はフラダンスを習っていました。海外旅行が趣味で、中でも一番のお気に入りハワイだったからです。しかしダンスとなると話は別です。魅力を感じてはいたものの踊りには熱心になれず、振付もなかなか入らない（おぼえられない）ような状態でした。実はスパリゾート

トハワイアンズのことを知ったのもこの時が初めてでした。愛知と福島には、実際以上に心理的な距離があったのです。

しかし、映画に登場するスパリゾートハワイアンズのダンサーたちのなんと魅力的なこと！自分たち自身が被災者であるにもかかわらず、故郷のために立ち上がり、どんな状況下でもスマイルで、応援してください、忘れないでくださいとのどをからし、踊っている。——大海は、女性として、人間として、彼女たちの強さに尊敬と憧れの念を抱いたのです。

その頃、大海の所属する社会貢献推進課では、あるプロジェクトが進んでいました。二〇〇七年から開催していた環境社会貢献イベント「DECO（デコ）スクール」を、二〇一二年から社会貢献全般を対象とした新たなイベント「デンソーグループハートフルまつり」に模様替えすることが決まったのです。

テーマは「東北」でした。東日本大震災から一年が経とうとしていましたが、思ったように復興が進まない一方で、世間では少しずつ震災の記憶が風化しつつある。そんな状況にくさびを打とうということで東北がテーマに選ばれたのです。

大海はあるアイデアを思いつきました。

「このイベントで彼女たちに踊ってほしい。愛知の人びとにあのすばらしい踊りを見てほしい。何より自分自身がフラガールの踊りをこの目に焼き付けたい」

そしてこの後、彼女の思いをきっかけとして、多くの社員のスピリットに火が点き、デンソーグループとフラダンスという、普通なら出合わなかった可能性の高い二つの文化が融合していきます。

ただし、それは多くの困難を伴いました。

なにしろ工場と南国の踊り、理系と文系、理論と感情、のちがいがあからずです。

それに加えて、企業内で事業とは直接関わりのないプロジェクトをゼロから育て上げることのむずかしさ、善意でつながっている人と人に生じがちな葛藤や、さらには、支援者と被災者という立場のちがいを調整することのむずかしさ、といったことがプロジェクトの進行とともに少しずつ明らかになっていきます。

デンソーグループフラガルたちは、こうした課題を一つずつ解決しながら、八年間という長い時間を走り（踊り）続けました。

「継続」は意義深いことです。しかし、彼女たちは単に「継続」したのではなく、企業が社会に向けて発信する善意や行動について根本的な「問い」を投げかけました。この一点だけでも、デンソーグループフラガルが、価値ある挑戦だったとご理解いただけるはずです。

もちろん、彼女たちの力だけでここまで来ることができたわけではありません。

本書を一読していただければ、多くのデンソー社員が、グループの掲げる「総智・総力」のスピリットを随所で発揮し、彼女たちとともに歩んでいたことに気づくでしょう。そして、多くの社員がそこに、「やりがい」や「喜び」を見出したことにも。

デンスーグループが、彼女たちの残した熱を、解散後も大切に保ち続けている理由が、ここに
あります。

第1章

デンソーグループフラガール誕生 17

- 1 東日本大震災から一年 18
 ハワイアンスのダンサーを呼ぼう／「よそ者、若者、バカ者」がプロジェクトを動かす
- 2 デンソーGフラガール結成 25
 個のアイテアを組織の実践に昇華させた「総智・総力」／一気呵成のスタート
- 3 とにかく練習、ひたすら練習 33
 自主性がグループを強くする／流されないためにしたこと
- 4 本番当日 40
 沈黙、スマイル、そして……／新しい支援のかたち／濃密な三か月

コラム1 デンソースピリットとは 46

第2章

デンソーGフラガール第1期の奮闘 49

- 1 初めての東北訪問 50
 固まっていくアイデンティティ／祈りと誓いの旅／感激の公式認定
- 2 社内にも浸透していくフラガールの活動 56
 思わぬオファー／新調したレイ

- 3 スパリゾートハワイアンスから表敬訪問を受ける 60
 夢の実現／ソウルソング・ソウルダンス

コラム2 デンソーグループのサステナビリティ経営と社会貢献活動 65

第3章

デンソーGフラガール成長期 67

- 1 第2期デンソーGフラガール結成 68
 第1期から第2期へ／フラガールという、かけがえない場所／活動の場を広げる／最後まで悩んだ二つの案件／周囲の協力／チャリティ・フレイイベントの自主開催
- 2 驚きや感動を提供する工夫 81
 期待を超えるために／ますます熱が入る練習
- 3 メッセージジャーとして 89
 「屋ボラ隊」や女子陸上長距離部との連携／スタディツアーへの参加／「ともに過ごす」ということ／五分に込めたメッセージ／言葉やダンス以外でもメッセージを伝える／ツアーによってメンバーが得たこと

コラム3 デンソーグループ 東日本大震災 復興支援一〇年史 111

第4章

活動の転機と終焉 113

- 1 内なるギャップ 114
 「アロハ」の意味／こだわりゆえに生じる溝／痛感した、チームをマネジメントする力の必要性

第1章

デンソーグループフラガール誕生

2 深い悩み 120
根本的な疑問／出口はどこ？

3 新型コロナウイルス禍での活動と決断 125
緊急事態宣言下の決断／最後のステージ

未来の支え方 133

1 フラガールが彼女たち自身に残したものの 134
一人ひとりから託されたメッセージ／活動を受け継ぐ

2 フラガールが企業に残したものの 140
とことんやり抜いた活動に関われた喜び——社会貢献推進部署に残したものの①／デンソーらしくないからこそ、デンソーらしさを——社会貢献推進部署に残したものの②／支え合うマインドの受け皿——社会貢献推進部署に残したもの③

3 デンソー総務部から見たデンソーGフラガール 144
モノづくりのストーリー——デンソーGフラガールのレガシー①／会社でなく社会の一員としての貢献——デンソーGフラガールのレガシー②／「私たちにできること」への気づき——デンソーGフラガールのレガシー③

4 彼女たちにできたこと 149
「ボランティア」を使わず社会貢献を広げる／「好き」が社会貢献になっていく／ウェルビーイングが指し示す「社会の未来形」／続けるために発揮される「デンソーらしさ」／まだ見ぬ豊かな未来へ

ハワイアンスズのダンサーを呼ぼう

喉元過ぎれば熱さを忘れろと言います。

しかし株式会社デンソー（以下デンソー）にとって、東日本大震災は忘れようとしても忘れられない出来事でした。その経緯は「はじめに」で述べた通りです。甚大な被害を受けた東北地方以外の地域では、季節が進むごとに以前と同じ平穏な日常を取り戻しました。それは仕方のないことです。自分たちの生活を営んでいかなければならないのですから。しかし半年がすぎ、一年が経とうとしても、被災地の復興は進みません。支援活動を続けていたデンソーの社員の多くは、このギャップが飲み込めずいました。

だから、二〇一二年から、環境だけでなく、さまざまな地域課題を対象とした社会貢献イベント「デンソーグループハートフルまつり」（以下ハートフルまつり）に模様替えすることが決まった時、

「テーマは東北にしよう」

という声が社員からあがったのは、当然の成り行きでした。

東北とはもちろん「東日本の復興」の意味です。

この東北をテーマにした「ハートフルまつり」は、デンソー総務部ソーシャルリレーション室 社会貢献推進課が中心となり、コンテンツの決定から運営までを進めていきました。コンテンツ決定のポイントは、

「どんな企画なら東日本大震災のことを思い出してもらえるか」。

企画のひとつとして社会貢献推進課の大海が同僚とともに提案したのが、二〇一一年一〇月に公開されたドキュメンタリー映画『がんばっぺ フラガール!』の特別上映会でした。

映画は、地震、津波、原発事故、風評被害の四重苦にあえぐ福島県いわき市にあって、長年、大型レジャー施設として親しまれてきたスパリゾートハワイアンスが、自分たちも大きな被害を受けながら、幾多の苦難を乗り越え、営業を再開するまでの二〇〇日が描かれています。

映画の中心はスパリゾートハワイアンスの花形であるスパリゾートハワイアンス・ダンシングチームです。彼女たちは自分も被災者であるにもかかわらず、まだ震災の傷跡が生々しく残る二〇一一年四月には練習を再開します。

その時の様子を『がんばっぺ フラガール!』ではこのように伝えていきます。

「最初は元気よくいきましようと言っても何かみんな乗らないですね。スマイルもなし。でもやっているうちにだんだん変わってきましたね。スマイルが出たり、何か言う」と笑い声が出たり、最後はみんな明るくなりましたね。あの時はうれしかったですよね」

（早川和子（カレイナニ早川）先生の発言）

1 映画『がんばっぺ フラガール!』中のセリフより作成。

2 クラシックバレエからポリネシアン舞踊に転じハワイに留学。一九六五年から、常磐ハワイアンセンター（現スパリゾートハワイアンス）フラチームの養成に当たる。映画『フラガール』で松雪泰子さんが演じる平山まどかのモデルとなったが、人物像は脚色されている。「カレイナニ」は「美しいレイ」の意味。現在は常磐音楽舞踊学院最高顧問。

ダンサーたちは、五月に東北の復興を訴えるために全国巡業「フラガール全国さずなキャラバン」(以下、さずなキャラバン)を行います。被災者自身の踊りで、東日本大震災で傷ついた人たちの心をいやし、全国にスマイルを届けるためです。開業当時の宣伝興行以来、実に四六年ぶりの全国行脚でした。

映画は全国一二四か所に及ぶさずなキャラバンを追いかけます。ダンサーたちのスマイルに笑顔で応えてくれる人がほとんどでしたが、中には涙で返してくる人もいます。

たとえば、福島県南相馬市から避難した人びとが多く住んでいた群馬県片品村での公演では、「故郷を思い出す」と声をふるわせ涙をぬぐう、高齢の男性をカメラは捉えています。福島から避難した人たちにとってダンサーたちのスマイルは、南国情緒やいやしといったありきたりな意味を超えて「生きるよすが」になっていたのです。

思い出すことの大切さ――。

それはこの「ハートフルまつり」で訴えたかったことでした。しかし、映画を上映するだけで、この訴えが来場者のみなさんの心に届くかどうかは、心もとないようにも感じました。「ハートフルまつり」に参加する人たちにハワイアンズのダンサーチームの姿をもっと強く印象づけたい。そうすれば、早くも薄れつつあった東北復興への関心を、もう一度呼び覚ますことができるのではないか。

そして、大海の出した答えは、

「ハワイアンズのみなさんをお呼びすればいいんだ！」

映画と併せて、目の前であのダンサーたちの踊りを見れば、被災地から遠く離れた愛知県の人たちにも、あの三月一日の出来事を思い出させ、遅々として進まない復興に関心を寄せ、自分でできることはないかと考えてくれるはずです。

さっそく、スパリゾートハワイアンズへ出演交渉の電話をかけ、映画を見て感動したこと、ダンサーたちの活動とスマイルに心を打たれたこと、東日本大震災の記憶を風化させはならないという趣旨に共鳴したこと、そして「ハートフルまつり」のためにダンサーたちの力を貸してほしいことなどを、ありったけの情熱で訴えました。

しかし、願いはあっさり拒まれてしまいました。

実は二〇一一年一〇月にスパリゾートハワイアンズは一部営業を再開し、ダンサーたちもキャラバンを終え、ホームグラウンドであるスパリゾートハワイアンズの舞台ですでに活動していたのです。今は愛知県まで遠征する余裕がないということでした。

さらにシヨックだったのは、先方がデンソーという会社を知らない様子だったことでした。しかしそれはお互いさまでした。実はデンソーにも、スパリゾートハワイアンズやダンシングチームのことをくわしく知っている人間はあまりいなかったのです。

しかし、愛知県在住の人間が福島県に、福島県の人間が愛知県に、馴染みが薄いというのは仕方のないことなのです。なにしろ五〇〇キロも離れているのですから。知らなければ知らうと努力すればいいのです。

「よそ者、若者、バカ者」がプロジェクトを動かす

少々乱暴な言葉ですが、二〇年ほど前から「町おこし」など地域を活性化させる活動には「よそ者、若者、バカ者」の存在が不可欠だと言われています。元々その土地の住民で、地域の中心として運営を取り仕切っている人たちはどうしても、地域に活力を与える柔軟な発想や、それをやり通す熱量に欠けるきらいがある。その点、この三者にはそれらを補ってあまりある可能性が秘められている。したがって、地域活性化の活動は、彼らをキーパーソンにすえるべきだという考えです。

従来、この言葉は字義どおりに解釈されてきました。

つまり、事情をよく理解していない人を外部から招へいし（よそ者）、経験が浅く年齢の若い人を中心にプロジェクトを立ち上げ（若者）、常識や周囲の反対を意に介さない強引な人材（バカ者）に運営を任せるという意味です。

しかし、こんな人がプロジェクトの中心人物足りえるでしょうか。リアルに考えれば計画は頓挫する可能性が高いでしょう。なぜなら、組織の力をまったく軽視しているからです。要は「よそ者、若者、バカ者」の本質を捉えることです。それは、出身地や年齢、性格や考え方ではなく「よそ者のように外部視点を持ち、若者のようにリスクを恐れず前向きに行動を起こし、バカ者のように一途に挑戦する熱意がある」人材という意味なのです。そんな人材が、熱意と行動力で組織を巻き込み、みんなと手を携えていくからこそ、困難なプロジェクトであつても成功に導くことができます。

彼女はハワイアンズダンシングチームに出演が叶わなくても、あきらめません。すぐに次の一手を考えました。

一方、組織側に必要なのは、「よそ者、若者、バカ者」の熱意と真剣に向き合い、その目的や利益と、組織全体の目的や利益とを引き比べ、合致すれば、全力でサポートすることです。「臭いものには蓋」「勝手にやらせておけ」という態度では、やがて「よそ者、若者、バカ者」は組織を離れ、組織自体も衰弱します。

さて「よそ者、若者、バカ者」要素は、いつもその人に備わっているものではありません。誰もが秘めており、時機を得た時に初めて発揮されるものです。

この時は、大海がその時機を得たのでしよう。

彼女はハワイアンズダンシングチームに出演が叶わなくても、あきらめません。

すぐに次の一手を考えました。

気づいたのは、リアリティが必要だということでした。

自分が東日本大震災について他人事に思えなかったのは、震災のたった二日前に東京へ出張して帰宅難民のニュースにたいへんなリアリティを感じたからだ。そして『がんばっぺ フラガール！』に感動し、あの未曾有の困難すら笑顔で乗り越えようとするたくましさを実感できたのも、フラダンスを経験していたおかげで、ダンサーたちと自分とを重ね合わせることができたからだ。

リアリティを感じることができれば、被災地から遠く離れた愛知の人たちも「行動を起こそう」と考えてくれるのではないか。そう思い至ったのです。

大切なのはリアリティ——。そんなことをあれこれ考えているうちに、こんなアイデアがひ

3 事業構想大学院大学出版部『月刊事業構想』2016年10月号
 〈<https://www.projectdesign.jp/201610/project-nippon/003190.php>〉
 より抜粋・加筆。

らめきました。

「そうだ、自分たちで踊ろう。フラダンスのすばらしさを間近で体感できれば、観客はハワイアンのダンサーたちの行動の尊さと復興の大切さを、リアリティをもって感じてくれるにちがいない」

それに加えて、現地へ支援に行きたいが、諸事情でそれが叶わない自分と同じような思いを抱えた社員が大勢いるかもしれないと思いました。社内でフラガールを募集すればその人たちの思いもすくい上げることができるとは思いません。また、フラダンスを楽しみながら世のため人のためになるという、新しいかたちの社会貢献活動を作り上げることができるとは思いません。さらにはこれが、社員有志による復興支援のグループを立ち上げるきっかけとなり、メンバー一人ひとりが東北のことを考えて、周囲に伝えていけば、映画鑑賞だけより二重三重の効果が期待できるのではないか。

「これは名案だ」

二〇一二年二月、大海は、デンソー内にフラガールチームを結成したい旨を社内にも上申しました。彼女には自らが「よそ者、若者、バカ者」となる覚悟ができていたのでしょう。

しかし、この時はまだ、デンソーグループフラガール（以下、デンソーGフラガール）は、彼女一人の空想の産物にすぎませんでした。

2

デンソーGフラガール結成

—— 個のアイデアを組織の実践に昇華させた「総智・総力」

彼女の乾坤一擲（は大げさかもしれませんが）の上申は、まず直属の上司である杉浦龍次課長（当時）に却下されてしまいます。杉浦にはフラガールと東北復興支援活動がむすびつかないのです。また、やる気ばかりが先行し、プランのコンセプトも実施方法もあいまいな状態だったからです。

岩田泰志総務部長（当時）も杉浦と同じように受け止めました。岩田は、社会貢献活動の重要な課題は、わかっている者同士で盛り上がるのではなく、無関心な人たちをいかに惹きつけるかだと考えていました。だから、初めてフラガールの企画を提案された時、

「わかりません」

とはっきり答えました。私たちに伝わらないのだから、観にいらっしやる人たちにはなおさら伝わるわけがない。やってみようというところを大切にしたい気持ちもある。しかし、「フラダンスで応援」というだけでは、客寄せパンダに終わってしまう。やるからには観客の心に響く社会貢献活動のイベントにしてほしい、ということです。

つまり、「目的をはっきりさせましょう」ということです。

問題はこれだけではありませんでした。

懸念されたのは、フラダンスの衣装でした。

なんととってもフラは、南国ハワイ・ポリネシアの民族舞踊です。「腰みの」と呼ばれるモレスカートや、背中や胸元が開放的なベアトップやキャミソールなど他のダンスより肌の露出度の高い衣装が多くあります。映画『フラガール』でも、第一期のダンサーに対する説明会の場面で、フラダンスの映像が流れた途端に、

「おら、ケツふれねえ」

「とんでもねえ。おらの裸、見世物でねえ」

と、参加希望者が会場を去っていくシーンがありました。

また、ようやく完成した衣装を自宅で弟妹たちに見せていたヒロインの友人早苗（徳永えりさん）が、鉾山を解雇され酔って帰ってきた父親（高橋克実さん）に「この恥知らずが」と殴られるシーンもありました。

現在は日本においても、フラダンスは習い事のひとつとして年齢を問わず多くの人に親しまれています。衣装も、腰みのやベアトップだけでなく、ムーミーのようなロングのワンピースなども用いられます。フラダンスは扇情的な踊りではなく、いやしと安らぎのダンスなのです。「好奇心をおおる見世物」ではありません。

杉浦は長年、人事部でバスケットボールや陸上競技など女子スポーツチームの総括事務局を担当していました。近年、女子スポーツ界では競技会場での盗撮といった一部ファンの心ない行為

が問題になっており、杉浦も対応に追われた経験がありました。東北の復興を願う催しに、勘ちがいた人たちが紛れ込んでしまったら、イベントはもちろん、ダンサーとして参加する社員にもダメージを与えてしまいます。また一時期流行した地方アイドルみたいな扱いを受ける恐れだつてなきにしもあらずです。そういった事態は避けなければなりません。同じような懸念の声は、他の社員からも寄せられました。

結局、「ハートフルまつり」の主要コンテンツが次々と決定し、準備が進んでいく中であつて、フラガールだけは承認が下りませんでした。

大海が上申したのは二月でした。

三月、そして四月の声を聞いても状況は変わりません。初舞台となるはずだった「ハートフルまつり」は七月一日です。しかし大海はあきらめられません。そこで杉浦に相談し、課題をあぶりだし、解決策を考え、内容の練り込みを行いました。最初は否定的だった杉浦も彼女の真摯な態度に打たれ、あれこれと相談にのりました。そして大海は、これが最後と決めて、もう一度、企画を上申しました。

「プロを招くより、身近な存在である職場の同僚や部下が、自分のためだけでなく被災地のため、社会のために心を込めて踊るのです。その姿、その笑顔を見て、東北の実情を実感してくれば、みんなきつと訴えに共鳴してくれるはずです。なぜ他の企画がよくてフラダンスがダメなのか、私にはどうしても理解できません」

この熱っぽい訴えには、さすがに他の社員も納得せざるを得ませんでした。もちろん熱意だけ

ではなく、誰もが納得する内容になっていました。大海はフラガールの活動に二つの約束を設定したのです。それは、

「フラダンスをけっして客寄せパンダにしない」

「社会貢献であることをしっかり伝える内容にする」

です。実を言うと、大海はこの時、これらを具体化させるプランはなく、企画を認めてもらいたい一心でこの約束を提案したのです。しかしこれは後に、フラガールの活動をブレさせないガイドラインのような役割を果たすことになりました。

こうしてデンソーGフラガールはようやくスタートラインに立ったのでした。岩田をはじめとする総務部も、全面的なバックアップを約束してくれました。とくに杉浦は、

「やるからにはとことんやろうよ」

と、社会貢献推進課をあげた後押しを約束しました。ただし、まだメンバーも予算も認知度もゼロです。これが海のものか山のものは、発案者にもわかりませんでした。しかし、多くの関係者の心にある「総智・総力」というデンソースピリットのキーが、ぎゅっと押されたことだけはまちがいないようでした。

―― 一気呵成のスタート

二〇二二年四月一七日。社会貢献推進課内に設けられたフラガールの事務局は、社内のイントラ

ネットやポスターを通じて、デンソー本社の社員だけでなく、正規非正規を問わず製作所やデンソーグループ会社に勤める全社員を対象に、メンバーの募集を開始しました。

「東北にフラで笑顔を届けよう！」

「フラダンス未経験者歓迎！」

テーマは東北の復興でしたが、ボランティアや社会貢献といった文言は前面に出さず、肩ひじの張らない、新しいかたちの社会貢献活動だという点をアピールしました。間口を広く、ハードルを低くして、多くの人たちの秘めた思いに訴えようという意図です。

また一方、すでに東北復興支援に取り組んでいた社員にも声をかけました。フラガールが自主活動として進んでいくには、事務局の判断だけではなく、コアとなるメンバーの力が必要だと考えたからです。第1期生のめぐさんはその一人です。彼女は東日本大震災が発生した二か月後には個人ボランティアとして現地入りしたり、その後デンソーが人的支援を開始した際にも自ら手をあげて参加していました。フラダンスは未経験でしたが、ゼロからの出発にやりがいを感じており、リーダーとして適任でした。

募集を開始して一週間後の四月二三日、二四日には募集説明会を開催。集まった人たちに、事務局からフラガール活動に込められた思いが伝えられました。

そして募集締め切りの四月二五日がやってきました。

集まったのは計二六名でした。何もかもが急ごしらえの中で、踊りをマスターできるのか自信がもてないと考えた三名が泣く泣く参加を断念し、締め切り翌日の四月二六日に、二三名でデン

ソーGフラガールは活動を開始しました。

七月一日の本番までには二か月半もありません。そのうえキックオフ直後にはゴールデンウィークがあるではありませんか。いつもは楽しい黄金週間ですが、この時ばかりはみんな、ちよつとうらめしい思いでカレンダーを眺めました。

事務局では、メンバー募集と同時並行で、愛知淑徳大学のフラサークル「OH! OH!」（オルオル。ハワイ語で「心地よい」）の協力をとりつけていました。ハートフルまつりの前身「DECOスクール」時代から愛知淑徳大学とは協力関係にあり、偶然、同大学にフラサークルが存在することを知ったのが縁です。締め切り当日の四月二五日には大学を訪れサークルの部長と面会。さつそくハートフルまつりで踊る曲や振付の打ち合わせを始めました。

持ち時間の関係で披露するのは三曲にしました。一曲は映画『フラガール』の主題歌である「虹を」に即決しました。デンソーグループとフラダンスをむすびつけるきっかけであり、「大地に光を果てしない夢を 太陽にキスを変わらぬ瞳を……」の歌いだしで始まるこの希望に満ちた曲を、どうしても披露したかったのです。

他の二曲はオルオルのレパートリーから選ぶことにしました。一緒に踊ることができ、振付を指導してもらうにも好都合だからです。そして、ディズニー映画『リロ&スティッチ』の劇中音楽である「He Mele No Lilo」（ヘメレノリロ）と、誰もが口ずさむことのできるハワイアンのスタンダード曲「月の夜は」（Sophisticated Hula）の二曲を選びました。

フラダンスは一見、簡単そうに見えます。動きはおだやか、体力も不要だと思われがちです。

しかし、経験者と初心者の間には、思った以上に大きな差があります。この時はメンバー二三人中、約八割が初心者でした。しかしデンソーGフラガールには講師がいません。そこで事務局スタッフが基礎レッスンを組んだり、振付の第一歩を教えたりすることから始めました。さらに経験者メンバーも加わって、むずかしい振付を踊りやすく変更したり、あるいはYouTubeなど動画を、自主練習の教材として準備するなどして、初心者を支えました。事務局スタッフが窓口とはなるものの、さまざまな局面で、メンバーが互いに支え合って前進していくというこの方法は、後にデンソーGフラガールのよき伝統となります。

さて、振付を共有することができれば、あとは各自の努力で踊りをマスターし、少しずつブラッシュアップしていくだけです。二か月間しかありませんでしたが、事務局はメンバーたちのやる気を信頼しました。自分の楽しみのためだけでなく、それに加えて自分以外のスマイルのためのダンスです。その趣旨をしつかりと理解したメンバーばかりだったので心配はしませんでした。残りは衣装です。人前で踊る、しかも急ごしらえのチームであるうえ、大勢の初心者がいるわけです。せめて衣装は揃えたいと考えました。揃いの衣装を着ると、踊りも揃っているように見えます。それに踊り手たちのモチベーションも高めてくれます。

ただし、フラダンス用のレイやヘアクリップを購入するだけで、一人あたり五〇〇〇円から一万円はかかってしまいます。無理やり押し込んだ企画ということもあり、会社に予算を組んでもらうこともむずかしい。さて、どうしたものか？

ゴールデンウィーク中の五月三日に、オルオルが東谷山フルーツパーク（名古屋守山区の農

業公園)のステージに出演していました。その舞台で、彼女たちは白いチューブブラウスに茶色のパウスカート、色ちがいのレイとヘアクリップ、クベエ(プレスレットのこと)といったアクセサリーを付けていました。とてもすてきだったのでくわしく尋ねると、比較的安く揃えられることがわかりました。また、アクセサリーは手作りで作れそうです。これならなんとか揃えられそうです。

白いチューブブラウスは生地問屋で人数分を安く仕立て、パウスカートは各自好きな色・柄のものを購入してもらうことになりました。アクセサリーは百円ショップで大量購入したレイを分解し、四本分の花で一本のゴージャスなレイ、二本分でヘアクリップとクベエを作りました。

作業はメンバー各自に任せました。レイはフラダンスだけでなく、今日でもハワイの文化と社会にとって大切なアイテムのひとつです。愛する人や大切な人にささげるものとして有名ですが、フラダンスと共鳴し、そのメッセージをさらに深める役割も果たしていると言われています。デンソーGフラガールの出発にあたり、レイをメンバー一人ひとりが手作りしたのは、とても意義深いことでした。

3

とにかく練習、ひたすら練習

—— 自主性がグループを強くする

デンソーGフラガールの目指したところは、上手なステージではありません。東北復興というメッセージが伝わるステージでした。そのためにすべきことは、踊りが揃っていること、そしてスマイルを絶やさないことでした。

ゴールデンウィーク明けの五月一五日。メンバーがデンソー本社内に集まって、初めての練習会を開きました。場所は「体力づくり教室」と呼ばれている部屋です。壁に鏡が設置されているので、フラの練習には格好の場所でした。

まずはステップとハンドモーションです。これらをダンスの基礎練習に取り入れ、ある程度できたところで経験者の振付を真似することで、さらになめらかな動きを習得できるように工夫しました。

フリ入れは、歌詞が日本語でスローテンポの「月の夜は」から。ハンドモーションは手話のよくなもので、一つひとつの振付に意味があります。したがって日本語の歌詞である「虹を」や「月の夜は」は比較のおぼえやすいのです。

さらに忘れてはいけないのがスマイルです。振付をおぼえられなかったり、手足が思うように

動かなかったりすると、どうしても顔がこわばってしまいます。

そんな時はみんなで、

「スマイル、スマイル」

と声を掛け合うようにしました。

練習には、昼休みや終業後の時間があてられました。

しかし、全員が本社勤務ではありません。メンバーの所属は、本社、西尾製作所、高棚製作所、池田工場とまちまちでした。一番遠くから本社までは車で三〇〜四〇分かります。これでは昼休みに「体力づくり教室」まで出向くことはできません。また子育て中のメンバーがいました。終業後の練習会参加は無理です。このように、同じ会社の社員なのに一堂に会することがたいへんむずかしかったです。

何か解決法はないものか。

幸いなことに当時、各製作所、工場にフラ経験者が一人以上いました。そこで彼女たちが中心になって製作所、工場単位で小グループを編成。そして小グループ単位で練習するとともに、経験者同士が横に連携することで練習内容の足並みを揃えました。

その練習時間にもやはり限りがあるため、メンバーは一人ひとり自主練習を行いました。あらかじめ準備していた動画を参考にしながら、ある人は自宅のリビングで、ある人は通勤中の電車内で、またある人は家族が寝静まった後に、足のステップやハンドモーションをおさらいしました。短期決戦。メンバーはみな真剣でした。

これらの工夫は事務局が仕掛けたり、強制したりしたわけではありません。

事務局では、練習会だけでなく全体説明の場を数回設けたのですが、それ以降は、メンバーたちが自主的に話し合い、このような仕組みをつくり上げたのでした。

本番はデンソーフラガールとオルオルの群舞です。

もちろんオルオルのほうが、キャリアが長く、踊りも上手です。しかし客演として招くのですから、デンソーフラガールはオルオルにおんぶにだっこではなく、逆にリードするような気持ちで臨みたい。そうでなければ、協力してくれた学生のみなさんに失礼にあたる。しっかりとフリを入れ、踊りを合わせていきましょう。デンソーフラガールたちの中には、いつしかこんなはつきりした意識が芽生えていました。

このように、デンソーフラガールは結成したばかりにもかかわらず、チームとして最大限の力を発揮することに成功しました。振り返って考えると、それは決して容易ではない、かつ達成しなければいけない明確なゴール（ミッション）があったおかげだったと思います。誰もが手探りの中、一人ひとりが全力を出し、仲間と信頼し合い、みんなで一から作り上げることに。それが彼女たちのモチベーションに火をつけたのです。

仕事やプライベートの合間を練習に割くのはたいへんそうでした。しかし、リーダーの役割を担っためぐさんは、

「青春って感じてでした」

と、当手を振り返ります。第1期生たちは、まるでインターハイや学校祭を目指して練習や準

備に打ち込んだ高校生みたいで、フラガールの活動に取り組みました。

——流されないためにしたこと

オルオルとの初の合同練習は、本番二週間前の六月一七日に行われました。

全員が集まれるよう日曜に設定しましたが、そのことに不満を述べるメンバーはいませんでした。それよりメンバー同士にも、この日が初顔合わせという人たちがいたほどだったので、内容の濃い集まりにしようと全員が意気込んでいました。

その日はまず、全員で『がんばっぺ フラガール!』を鑑賞することから始めました。本番は映画鑑賞後にフラダンスのステージを行うという段取りです。その流れをイメージしてもらったのでした。さらにこのイベントは、フラダンスを通じて復興半ばの東北を思い出させ、支援のきっかけとってもらうことが目的であり、それがフラガールの使命であるということを、事務局とメンバーたちは何度も確かめました。

確かめ合ったといっても、

「わかりましたか？」

「はい／いいえ」

だけでは、本当に意図が通じたかどうか定かではありません。また当時は、フォロワーのためのSNSも普及半ばだったので、頻繁なやりとりもむずかしい。そこで集まりの最後にアンケートをとりました。

質問事項は、

「映画を見て他人事ではなく自分のことと捉え、行動しようと思えましたか？」

「フラを練習して想像よりむずかしいと感じましたか？」

「日々の練習を通して心境の変化があったら教えてください」

「ハートフルまつりでフラを踊ることで東北に元気を届けられると思いますか？」

「ハートフルまつりでは会場のみなさんに何を伝えたいですか？」

などでした。

統計をとるためのアンケートではなく、参加者が質問を読み、それに対する返答を考えることで、気持ちやころざしの方向をひとつにするのが目的でした。気持ちをひとつにするには、一方通行でなく双方方向のコミュニケーションが大切です。アンケートは効果的なツールとなりました。

さて、スマイルといっても、ただ笑っていればよいのでもありません。考えなくても踊れるようになるまで、表情に気を配っても踊りが乱れないようになるまでには、踊り込む以外に道はありません。そろそろ梅雨の声を聞く六月。メンバーたちはしたたる汗をぬぐうことも忘れて練習に打ち込みました。こうやってデンソーGフラガールの初舞台は少しずつかたちを見せ始めました。

また、こうした練習風景を写真に収めました。

この写真を使い、メンバーから聞き取った活動への思いを伝えるムービーを作成したのです。本番のステージで流し、フラガールの思いを観客のみなさんに知ってもらうためです。活動開始の約束だった「社会貢献であることをしっかりと伝える内容にする」をクリアするためです。

動画はもう一本準備していました。

「ハートフルまつり」当日は、映画上映とフラダンス披露は別々の会場で行われます。フラダンスのステージだけを見るという人も大勢いるでしょう。それではフラガールたちのメッセージが伝わりません。そこで復興支援活動を経験した男性社員に依頼し、被災地や支援活動の様子と活動に込められた思いをムービーにまとめてもらったのです。これをフラガールたちが踊る直前に流せば、会場のみなさんにメッセージが伝わりやすくなるはずです。

それでも、たった三曲にメッセージを濃縮するにはまだ何か足りない気がしました。事務局はさらにいろいろな企画を考え、構成に盛り込んでいきました。どんな仕掛けを盛り込んだかは後で紹介しましょう。

さて、約束はもうひとつありました。「フラダンスをけっして客寄せパンダにしない」です。こちらは各メンバーへのお願いというかたちで徹底することにしました。

「東日本復興支援のために踊るという自覚をもつこと」

「フラダンスの衣装や化粧は露出が多く目立つ。ステージ外ではアクセサリー類を外し、上着を羽織ること」

「大声でしゃべったり、集団で固まったりしないこと」

派手な化粧をほどこし、華やかな衣装を着ると、多くのみなさんが注目してくれます。中にはちやほやしてくれる人もいるでしょう。でも、デンソーGフラガールはアイドルのようにもてはやされることが目的ではありません。日頃の努力が報われる場である本番ステージでは達成感に

酔い、つい目的を誤りがちです。それを恐れたのです。

見られているのはステージだけではありません。ステージ外の行動で後ろ指を指されては、活動の本気度が疑われてしまいます。事務局はこうしたルールをメンバーに徹底しました。しかし、メンバーたちのほうがすでに活動の趣旨をよく理解しているようでした。

六月三〇日の本番前日、実際に立つステージで最終リハーサル（ゲネプロ）が行われました。オルオルのゲストも加えて総勢四〇名が集うステージは壮観でした。たった二か月でしたが、全員の創意工夫とチームワークと努力により、振付のまちがいほとんどありません。踊りも揃っていました。ただ客席から見ていた事務局スタッフは、何かが足りないと思いました。それは、デンソーGフラガールにとって一番忘れてはいけないスマイルでした。

考えてみれば、練習では鏡に映った自分たちの姿しか目に入りません。しかしステージ上からは広い観客席が見えます。ここが満員の観客で埋まると思うと……。そのうえ、まばゆいばかりのスポットライト。その緊張が表情を硬くさせていたのです。

「どうしたの。みんな。スマイル、スマイルよ」

するとメンバーたちはハッとわれに返り、一斉に笑顔を取り戻しました。

その時、スタッフ一同はこのデンソーGフラガールの企画は成功すると確信しました。

——沈黙、スマイル、そして……

そしてデンソーフラガールは「ハートフルまつり」本番当日を迎えました。

会場入りし、控え室で舞台メイクをほどこし、衣装に袖を通していくうちに、メンバーたちの緊張感は少しずつ高まってきました。前夜眠れなかったメンバーもいました。しかし何時になっても少しも眠くありません。それも緊張のなせるわざだったのでしょう。とにかくメンバーたちの頭の中はステージの段取りと振付で一杯になりました。

映画『がんばっぺ フラガール！』の上映が始まりました。本社五号館二階のMR213会議室です。多くの来場者が一〇二分の作品に目を凝らしました。すでに目を潤ませている人もいます。上映が終わると、ほとんどの人は同じ五号館の大ホールへと移動しました。ふだんは社員の大きな集まりなどに使われる一七〇〇人収容のホールです。

いよいよ出演時間になりました。

デンソーの復興支援ボランティアによる現地での活動をまとめたムービーが流れます。

つぶれた家、打ち上げられた漁船、不安な面持ちの被災者たち。大震災が起きたあの日、多くの人がテレビで目の当たりにした衝撃的な光景が流れます。その同じ場所で被災者とデンソーか

ら派遣されたボランティアとが、力を合わせて作業に没頭する光景が映し出されます。がれきの撤去、道路の補修、避難所の設営、救援物資の仕分け——。

観客席は満員。立ち見が出るほどの盛況です。その全員が、復興支援のムービーを、固唾を飲んで見つめています。映画を見た人も、見ていなかった人も、一年数か月前の記憶を呼び覚まされたのでしょうか。暗く、真剣なまなざしが目立ちます。会場は静まり返りました。咳ひとつ聞かえません。しかし、そこへ……。

デンソーフラガールが登壇しました。

会場は一気に華やいだ雰囲気になりました。

観客席や舞台袖で彼女たちを見守っていた事務局スタッフの面々は、メンバー一人ひとりの表情を確かめました。

みんながスマイルです。そのスマイルにつられて観客のみなさんも、まるで南国の花が一度に咲いたように、しかつめ顔から笑顔に変わりました。

一曲目は「He Mele No Lilo」。耳馴染みのあるディズニー映画の曲です。もう体を揺らしている子どもたちがあります。二曲目は「月の夜は」です。これは誰もが知っているハワイアンのレストラン曲。そこで観客に簡単なハンドモーションをおぼえてもらい一緒に踊りました。さらには、メンバーがあらかじめ準備したメッセージ付きの花のブレスレットを観客に配りました。大いに盛り上がったことは言うまでもありません。

踊り手と観客が一体になったところで、練習風景やメンバーの想い、願いをつづったムービー

をバックに、最後の曲「虹を」を踊りました。

メンバーはもちろん、スマイルを忘れませんでした。

しかし、会場からはハンカチを目頭に当てる人が現れ、すすり泣きがあちこちから聞こえてきました。メンバーたちの踊りを通じて、ハワイアンのダンサーたちのリアリティを、そして東北のリアリティを感じ取ってくれたのでしょう。最後は万雷の拍手。そして退場。しかし会場を後にしてもデンソーGフラガールは、安どの雄たけびをあげたりしません。「東日本復興支援のために踊るという自覚をもつこと」。彼女たちは最後までそれを貫いたのでした。

しかし、小さな声でこんなふうにも、ささやき合ったのではないのでしょうか。

「伝わったかな」

「うん。伝わった、と思う」

「だと、うれしい」

「うん。とてもうれしい」

新しい支援のかたち

「ハートフルまつり」では来場者アンケートを実施していました。デンソーGフラガールのフラダンスはたいへん好評で、「また見たい」「来年も続けてほしい」という声が圧倒的でした。それはもちろんうれしかったのですが、メンバーにとって一番うれしかったのは、

「東北のことを忘れてはいけないと思った」

「支援を続けたい」

という声でした。もちろん「ハートフルまつり」全体で達成したものです。しかし、そこに少しでも貢献できたことが、彼女たちにも「やりがい」や「喜び」のようなものを与えたのです。その証拠に、フラガールのメンバーは「来年も続けてほしい」という声を受けて、事務局含めみんなで検討した結果、活動の継続を決めたのです。

ここにおいて、デンソーGフラガールは一時的なイベントではなく、継続していく支援のひとつとなったのです。しかも直接的な支援ではなく、広報とインフルエンサーを担う「勝手連」という、ちょっと変わった役割をもち、自分たちの私的な興味関心を社会貢献につなげるという、新しい支援のスタイルを確立したのです。

濃密な三か月

「ハートフルまつり」への参加決定から本番までの三か月弱の間、すべての段取りに関わった大海は、これまでの会社生活の中で一番濃密な三か月だったと振り返ります。

すべての問題が大至急。

すべての作業が泥縄式。

何かひとつ遅れればすべての段取りが崩れてしまうという綱渡りの連続。

ヒヤヒヤの毎日。

そして、ピンチのたびに強くなっていたメンバーのきずな。

しかし何かが始まる時というのは、おおむねそのようなものです。余裕をもって綿密に計画されたプロジェクトというのは案外、長続きしなかったりします。

そういえばその昔、ある炭鉱の町に持ち上がったレジャー施設でも同じようなことが起きたと聞いています。それまで学生だったり主婦だったり、事務員だったりした田舎町の平凡な女性たちが、自分たちのダンスで町おこしをしようと立ち上がったあの物語です。あの時も、常磐ハワイアンセンターのダンサーたちには、まったく素人の状態からマイクロバスに押し込められて全国キャラバンへと旅立つまで、たった三か月しか与えられていなかったのです。しかしその後、常磐ハワイアンセンターは、スパリゾートハワイアンズと名を変えながらも、半世紀以上にわたって東北に喜びとスマイルを与え続け、大震災で打ちひしがれた人びとの心の支えになりました。

デンソーGフラガールもそのような存在にしたい——。
この時、事務局スタッフ、メンバーはまちがいない、そう考えていました。



ハートフルまつり 2012 ステージ (2012.07.01)

株式会社デンソーのことを少しくわしくお話ししましょう。

当社は一九四九年にトヨタ自工（現トヨタ自動車）から分離独立し日本電装株式会社となったのが始まりです。以来、車載部品を中心としたメーカーとして、日本はもとより全世界で事業を展開しています。

設立時に唱えられた「モノづくりは人づくり」「技術と技能の両輪」という思想は、一九五六年に制定された「社是」、その社是から発展させ時代に先駆けるべく一九九四年に制定された「デンソー経営理念」に引き継がれました。現在はさらに内容に磨きをかけ、自分たちが目指す場所を指し示した「デンソー基本理念」、そして理念の実現へ近づくための心構え「デンソースピリット」として、あらゆる行動の指針となっています。

デンソー基本理念

世界と未来をみつめ 新しい価値の創造を通じて 人々の幸福に貢献する

デンソースピリット

「先進」「信頼」「総智・総力」

「先進」とは……デンソーにしかできない驚きや感動を提供することです。

先取、創造、挑戦がキーワードです。

「信頼」とは……お客様の期待を超える安心や喜びを届けることです。

品質第一、現地現物、カイゼンがキーワードです。

「総智・総力」とは……チームの力で最大の成果を発揮することです。

コミュニケーション、チームワーク、人材育成がキーワードです。

理念とスピリットは、メーカーとしての機能を果たす場合だけに発揮されるわけではありません。すべての社員が遭遇するあらゆる局面において指針となるものです。したがって本書を読むみなさんは、デンソーGフラガールの行動や考え方のすべてに、先進、信頼、総智・総力の精神を見出すことができるでしょう。

デンソースピリットを共有する上司、部下、同僚、そしてメンバーが集まったからこそ、デンソーGフラガールの活動は「多くの人に支持されること」「成功」したのです。

第 2 章

デンソーGフラガール第1期の奮闘

—— 固まってくアイデンティティ

デンソーグループの東日本大震災復興支援活動は、大地震発生当日の災害対策本部設置から始まりまし。

その後、福島県田村市に建設中だった新工場への避難者の受け入れ、社員による救援物資の収集と発送、そして現地への人的支援派遣などを行います。さらに同年には「デンソーグループはあとふる基金（以下、はあとふる基金）」から今後一〇年間寄付することが決まりました。

「はあとふる基金」とは、デンソーグループの社員有志からの給与天引による寄付で積み立てられた基金です。集まった基金は、被災地や災害ボランティア活動への助成、地域社会への貢献といった活動に使われます。この「一〇年」という期間はその後、デンソーグループの支援活動の目安となりました。

デンソーGフラガールも同様に、一〇年間の継続を目指そうという機運がメンバー内で高まりました。

「ハートフルまつり」の評判を聞きつけ、多くのイベントから出演依頼が舞い込んできたことも、モチベーションがアップした理由のひとつでした。

出演依頼があったのは、復興支援をうたった会社社運動会、デンソーが主催し一般の人たちも参加できる二年に一度のアイデアコンテスト「デンソー夢卵」等々です。福祉施設への慰問や懇親会、あるいは宴会の余興としての出演依頼もありました。取材依頼も多く寄せられました。新聞七紙、地元のコミュニティメディア二局（テレビ、ラジオ）、その他、福島県いわき市とベルマーク財団の広報ウェブページでも取り上げられました。

また、刈谷駅前で毎年三月一日（休日の場合はその前後の平日）に、NPO法人まちづくりかりやが主催する「かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜」では、冬場の屋外なので踊りがメインではなく、主に来場者への募金の呼びかけや物産展での販売のお手伝いが活動の中心でしたが、こうした活動にも、デンソーGフラガールの名前で積極的に関わっていくようにしました。すべて引き受けたわけではありません。東日本大震災復興支援と関係のない催しへの出演は辞めました。スタート時に交わした二つの約束にそぐわなかったからです。

こうした出演の可否は事務局が判断しました。基準は、事務局が納得し、整合性のある説明をメンバーたちにできるかどうか、でした。できると判断した場合はオフアを受け、できない場合は断るというわけです。

これほど反響があるとは、事務局もメンバーも想像していませんでした。それほどフラガールというコンテンツは強い訴求力があったのでしょう。始動時に二つの約束を付けたことが役に立ちました。何の準備もなく突然脚光を浴びると、本人たちはもちろん周囲もつい浮足立つものです。二つの約束はそれを未然に防いだのです。

祈りと誓いの旅

さて、メンバーの活動への思いは日に日に高まっていききました。

やがて「東北の復興のため」と言いながら、多くのメンバーは、被災地について、ニュースで見聞きし、同僚らから伝聞で知るだけで、実際に体験していないことに気づきました。

これではダンスに込めるメッセージも半端になってしまいそうです。

デンソーの社員が行動指針としている「デンソースピリット」にも「現地現物」という項目があります。何事も想像や憶測で物事を判断せず、現地へ行き現物に触れて、相手の立場を理解することから始めようという意味です。何より「百聞は一見に如かず」と古くから言われているではありませんか。

メンバーから「東北へ行き、この目で現状を確かめ、それを愛知県の人たちに伝えたい」という声があがったのは、当然の成り行きでした。

そこで希望者を募り、ちようと社内でベルマーク寄贈活動を行っている「昼ボラ隊」のメンバーも東北訪問を考えていたということで、合同で東北へ赴き、被災地を自分たちの目で確かめ、さらに被災者の人たちと交流をするツアーを組みました。

「昼ボラ隊」とは、昼の休憩時間にちよこつとボランティアをしようという活動で、社員自身が気づいた社会課題に対して、社員自らがメンバーを募り、企画運営して解決実践を行う有志のチームです。デンソーにはこのようなボランティアを行う有志のチームが多数存在し、総称してデンソーグループハートフルフレンドと呼んでいます。「昼ボラ隊」は、宮城県石巻市の開北小

学校で津波により校庭の時計が壊れてしまったという話を支援ボランティアの社員から聞いたことをきっかけに、ベルマークでその小学校に校庭用大時計を寄贈しようという活動を開始し、その贈呈を兼ねて東北の実情に触れたいということでした。

第一回のツアーは、大震災発生からちょうど二年後の、二〇一三年の三月一五日から一七日までの三日間で行われました。総勢四十数名、うちフラガール一五名です。

大型バスに一〇時間揺られ、まずは宮城県石巻市を訪れました。石巻市は旧北上川の河口に位置し、日本有数の漁港として有名です。しかし大震災時の津波によって市街地のほとんどが水没し、多くの被害と犠牲者を出してしまいました。目的地の開北小学校もいまだ津波の痕跡が校舎に残っている状態でした。

当日、開北小学校は卒業式でした。小学校側は十分に対応できないということだったので、設置されたばかりの校庭用大時計の前で、校長先生に目録を贈呈したら、早々に引き上げる予定でした。ところが目録の贈呈が終わると、ちよと卒業式を終えた児童が駆け寄ってきて、寄せ書きと感謝のスピーチ、そして全員による「竹田の子守歌」の合唱をプレゼントしてくれたのです。

一行は全員感激しました。

自分たちができることは、こんな想像を絶する被害に遭い、大切な人を失い、生活の糧や希望をなくした人たちの気持ちに寄り添い、この現実を愛知の人たちに伝えることだ。さらに、そうした気持ちを東北の人びとに伝えて、生きる勇気を奮い起こしてもらおうことだ。それができれば満足……だと思っていました。

ところが、勇気を与えるつもりが、逆に勇気を与えてもらったのです。現地現物のスピリットで事に当たるとは、想像以上でした。こうした思いを胸に、彼女たちは第二の訪問先へと向かいました。活動のきっかけとなった、福島県いわき市のスパリゾートハワイアンズです。

感激の公式認定

ハワイアンズへの訪問には、ひとつの大きな任務がありました。それは「お詫び」です。

実はこの時まで、デンソーGフラガールはハワイアンズの公式の認定を受けていなかったのです。読者の中には、「踊り」に公式認定などあるのかといぶかる向きもあるでしょう。法律上の決まりではありませんが、フラダンスの振付には、日本舞踊や茶道・華道などの伝統文化と同じように「流派」のようなものがあり、振付をした人に許可を得ないと真似してはいけないという不文律があるのです。

というのは、振付をした人は、曲の情景を思い浮かべ、歌詞の本質を理解して、その気持ちを振付に込めるからです。したがって、同じ曲でも団体によって振付はちがいが、振付を考えた人から直接伝授された者以外はその意味を理解できないはずなので、コピーして踊ってはいけないのです。事務局はそのことを知らないままスタートして、初舞台まで一気に駆け抜けてしまったのです。いえ、実は不文律があることは、なんとなく耳にはいました。しかし、東北の復興という共

通した思いなのだからよいだろうと甘く考え、配慮していなかったのです。しかもコピーしたのが、ハワイアンズの大切にしている曲「虹を」です。激怒されても仕方ありません。

訪問当日はまず、ハワイアンズの舞台でダンサーのショーを拝見しました。やはりプロフェッショナルの踊りはちがいます。デンソーGフラガールの面々はそれだけでも感激の面持ちでした。ところがその後、サプライズが待っていました。

ハワイアンズの計らいで、舞台の終了後、同ステージでデンソーGフラガールとハワイアンズのダンシングチームと一緒に踊る機会を設けてくださったのです。

曲は、デンソーGフラガールが「ハートフルまつり」で踊ったフラの名曲「月の夜は」。後で知ったことですが、ハワイアンズのダンサーが素人と一緒に踊るのはこれまでも、おそらく今後もないだろうという異例のことでした。

翌日、ハワイアンズ側はまるで報道記者会見のような立派な席を設けてくれました。思わぬ展開に一行は緊張しっぱなしでした。しかし、その正式な席で、ハワイアンズはデンソーGフラガールの活動の趣旨への理解と、「虹を」を今後も踊り続けることを認めてくださったのです。

そして、こうおっしゃってくれました。

「今後ともぜひ、活動を続けていってください」

デンソー側全員が感激したのは言うまでもありません。なんとと言ってもハワイアンズのみならずは全員が被災者だったので。しかしハワイアンズだけでなく、ツアーを通じ、開北小学校で集まってくれた児童たちや先生方の態度も同じだったことを、彼女たちは思い出しました。

「東北復興のために応援している」というフラガールの立場を、被災者のみなさんも支持してくれているということを確かめることができたわけです。その安心感は自信へとつながり、彼女たちの活動に大きな影響を与えました。また、この出来事によって、デンソーGフラガールは東日本復興のためだけに踊ることを改めて心に誓いました。

2

社内にも浸透していくフラガールの活動

—— 思わぬオフア——

初の東北応援ツアーから戻って間もないある日のこと。

デンソーGフラガールに加藤宣明社長（当時）から広報部を通じてオフアがありました。五月に開催される会社の「仕入先総会」でフラダンスを披露してほしいというのです。メンバーにはかれば、みんな名譽なことだ、ぜひやりたいと言おうでしょう。きっと誰もが誇りに思うにちがいありません。

しかし、と事務局は考えました。

社長からのオフアとはいえ「東北の復興」と「仕入先総会」とはつながりません。安易に受けてしまうと、フラガールのポリシーとズレが生じるのではないかと、と。

事務局は、このオフアを断ることにしました。

すると今度は、同じオフアが調達部のほうからも舞い込んできました。

二度も押されてしまうと、なかなか断り切れるものではありません。

そこで、あくまでデンソーの東日本復興支援の取り組みの紹介と位置づけ、活動の一環として、アルコールを提供する懇親会が始まる前に、ステージを披露することなどの条件付きで、オフアを受けることにしました。

後にわかったことですが、フラガールの提示した条件が通ったのは、社長自身が元々、フラガールの活動、中でもメンバーのモチベーションを高く評価してくださり、当社の取引先企業にもぜひ紹介したいと考えていたかららしいのです。

社会貢献を社是として掲げる企業はたくさんあります。しかし、それが企業文化として根付くのはたいへんなことです。デンソーには、企業文化として社会貢献を根付かせる強い意志がある。フラガールたちがそう実感した瞬間でした。

それにもうひとつ。これは、デンソーが標榜する「先進、信頼、総智・総力」の精神の現れだったのだろうということです。中でも、多くの社員の総智・総力を結集しようとすれば、上意下達の垂直型組織でなく、誰もが意見を言うことができる水平型組織である必要があるからです。

手前みそになります。この出来事はフラガール云々以前に、デンソーという企業の特徴を象徴する出来事だったと言えるのではないかと思います。

——新調したレイ

さて「仕入先総会」は名古屋の一流ホテルで開催されました。めったに足を踏み入れることがない高級なホテル、広く立派なホール、そして客席にはスーツ姿のデンソー役員と仕入先企業の経営者が並んでいましたから、メンバーたちの緊張感は並大抵ではありませんでした。しかしメンバーたちはあのスマイルを發揮。東北の現状を訴え、フラを踊り、支援活動への協力を呼びかけました。来場者のみなさんは、フラガールたちの訴えに真剣な表情で耳を傾けていました。会場の片隅に設けた募金箱にも寄付が集まりました。

後日、加藤社長からお礼の一報が事務局に入りました。事務局はメンバーを代表して貴重な機会を得たことへの感謝を述べると、加藤社長は当日の募金額について尋ねました。率直に金額を伝えると、

「それだけではフラガールのみなさんに申し訳がない。役員親睦会費からも寄付しよう」

と思ってもよらぬ申し出がありました。感激した事務局は、いただいた寄付金を東北へ寄付をする旨を伝えました。ところが……。

「いやいや。これはフラガールのみなさんに使ってほしいんだ。本当にありがとう」

役員親睦会費は、経費ではなくポケットマネーです。会社勤めの経験があるみなさんならおわ

かりになるかと思いますが、これはずいぶんうれしいものです。

下手な使い方をして無駄にしてしまった。でももったいない。

そこで、初舞台の折に手作りした、レイやヘアクリップを新調することにしました。

前述したように、レイはフラダンスの故郷ハワイにおいては大切なアイテムのひとつです。フラガールたちは、デンソースピリットを感じると同時に、改めて自分たちの活動の価値を確認しました。



新調したレイとヘアクリップ

スパリゾートハワイアンズから 表敬訪問を受ける

夢の実現

二〇一三年七月には第二回の「ハートフルまつり」に出演しました。
この年のテーマは「応援」でした。

前述した新聞記事でフラガールの取り組みを知った当社OBが組むハワイアンバンド「マウイ・アイランドース」から、「ぜひ活動を応援したい」とのありがたい申し出があり、生演奏との共演という夢のようなステージが実現しました。

そのステージも再び好評を博し、メンバー一同で充実感に浸っていると、ハワイアンズから驚きの連絡が入りました。なんと三月の訪問のお返しとして、ハワイアンズのダンサーがデンソーを訪れ、全社員に向けて特別ステージを披露してくれるというのです。

来社日は八月八日に決まりました。
ちょうどその頃、ハワイアンズのダンサーは、オリジナル曲「アイナふくしま」という新曲をリリースしていました（ハワイアンズ先行発売六月五日、全国発売八月九日）。「アイナ」とはハ

ワイ語で「ふるさと」という意味です。ハワイアンズのダンサーとファイヤーナイフダンサー全員で歌詞の作成と歌唱を担当、バンドメンバーが曲を付け、裏方のスタッフも協力して製作された、地元福島の応援歌です。

YouTubeでこの曲の踊りを拝見したメンバーたちはそのすばらしさに感激し、ぜひとも、来社いただいた折に一緒に踊らせてほしいと考えました。

無理を承知で打診してみると「ぜひやりましょう」ということです。

本番まで三週間しかありませんでしたが、デンソーGフラガルにはゼロから二か月半で初演をやり遂げた実績があります。さっそくフラ経験者が集まり、YouTubeを見て振付を読み解き、フリ入れを行いました。そしてその練習動画を全員に配布して自主練習してもらおうという、あの濃密な三か月と同じやり方でダンスをおぼえていきました。

ただし、さすがに期間が短く難易度も高いため、参加は任意としました。自主活動の場合、やる気はあっても仕事や家庭、プライベートな事情で練習時間を捻出できないメンバーがかならずいます。事務局としては、そんな時には無理強いをしたり、プレッシャーをかけたたりしない方針でした。そのほうが活動に愛着を抱きやすく、長続きすると考えていたからです。

当日、来社されたハワイアンズのダンサーは、トップダンサーであるモアナ梨江（現猪狩）大森（梨江）さんをはじめとする五名でした。

一行に対し、まずは加藤社長が挨拶。ハワイアンズからは、デンソーGフラガルをはじめとする東北復興への支援活動に関して、感謝の言葉を頂戴しました。加藤社長も震災直後に被災地

へ足を運んだ経験談を交え、励ましとさらなる支援を約束します。現地現物が信頼を生み、きずなへと発展した瞬間でした。

そして場所を特別ステージの会場である大ホールへと移し、まずはデンソーの松下恭規総務部長（当時）から、デンソーGフラガールと復興支援活動の紹介が行われました。続いて、福島県名古屋事務所の前所長から挨拶をいただきました。事務所は福島県から東海三県へ避難しているみなさんの相談窓口となっており、この公演でも仲立ちをしてくださったのです。

さていよいよ、ハワイアンズのダンサーによる特別ステージが始まりました。ステージではデンソーGフラガールとの共演も行われました。

デンソー内での催しでしたが、デンソー本社のある刈谷市の桜区のみなさんにも一般席を開放しました。また刈谷市当局から、福島県いわき市から愛知県に避難している方々がいるので招待してくれないかと打診がありました。そこで会場の最前列に一〇名分の招待席を設けました。

ところが開演後間もなく、思わぬ出来事が起きました。

招待客の一人が、ショーが始まるやいなや泣き出してしまったのです。

そういえば、映画『がんばっぺ フラガール!』でも、ハワイアンズダンシングチームのダンスに故郷の福島を思い出し、目頭を押さえる男性が登場しました。フラガールたちが、福島の人たちにとってフラダンスはただの踊りではないのだ、ということを確認した出来事でした。

すべての演目が終了し、来場者を含めた参加者全員の記念撮影を終えた後、中日新聞社による取材がありました。ハワイアンズダンシングチームのみなさんはその席上で、

「デンソーGフラガールに感謝したい」

という旨の発言をされました。翌朝、中日新聞の朝刊を開いてみると、その言葉がそのまま大見出しとなっていました。多くのメンバーたちはこの記事を誇りに思い、その後の活動の支えにしたということです。

ソウルソング・ソウルダンス

さて、観客席の最前列で号泣していた男性のことです。

Y・Tさんとおっしゃいます。

後日、長い手紙を頂戴しました。

Y・Tさんは、福島県いわき市からご兄弟を頼って愛知県に避難してきていました。さまざまな理由から福島に残ることを選んだ人たちは、除染作業が進みつつあったものの、いまだ高い放射線量を示していたことや、風評や根拠のないうわさによって、震災後二年（当時）を経ても、なお苦しめられていました。

Y・Tさんはそんな故郷の人びとのことを思う一方、



スバリゾートハワイアンズによるデンソー表敬訪問

避難を選んだことが「自分だけが助かればいいと思っている」「故郷を捨てたと思われても仕方がない」と日々、自責の念にかられていたのだそうです。その鬱々たる思いが、ハワイアンスのダンサーの音楽と踊りで一挙に噴き出したというのです。ハワイアンスのフラは、福島の人たちにとって、ソウルソング、ソウルダンスであると言います。彼のソウルにも届いたのでしょう。手紙を読んでメンバーたちは、

「これも自分たちの役割だ」

と思いました。被災地の実情を訴えメッセージャーとしての役割を果たすことは、復興支援だけでなく、避難している人びとの心にノスタルジーと安心、そして前に進むための勇気のようなものを、ほんのわずかもしれませんが、呼び起こすことができるのです。自分たちの活動は、人びとのソウルに訴えている。メンバーたちはより明確にそう考えるようになりました。

Column 2 デンソーグループの サステナビリティ経営と社会貢献活動

コラムで述べた「デンソースピリット」は、現在（二〇二二年）、デンソーの目指す「サステナビリティ経営」の底流にも流れています。

サステナビリティ経営とは「持続可能な社会づくりに貢献する経営」という意味です。二〇一六年に始まった国連のSDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標) を含むさまざまな持続可能な社会実現のための課題の中から、デンソーがとくに貢献でき、かつ重要度の高い「環境」「安心」「企業基盤」の三つを優先取り組み課題とし、これを梃子として社会課題解決に貢献することを目指しています。

デンソーグループは半世紀にわたり、「環境」や「安心」といった課題に対し、技術力や生産力の向上によって、社会に貢献する道を歩んできました。

しかし、サステナビリティ経営では、それらに加え、人材育成や健康管理といった「企業基盤の整備」と「社会貢献活動」も、重要な要素だと位置づけています。

「企業基盤の整備」の中心にあるのは人的資本の強化です。

従来から「最高の製品は、最高の人によって作られる」との考えから人材育成に尽力してきましたが、その重要性がますます高まってきているからです。

これまでも、無駄なプロセスや会議、作業などを排除し生産性を向上させることで、働く時間を減らす改革を

第3章

デンソーGフラガール成長期

進めてきました。これを発展させ、現在では、社員個人のモチベーションや、やりがいにも着目し、「従業員一人ひとりが能力を最大限に発揮し、いきいきと人生を送ることで企業も成長する」との考えを柱とした、働きがいを高める改革に着手しています。

「社会貢献活動」の中心には「よき企業市民であることが持続的成長につながる」という考え方があります。その理想を実現するために、すでに「環境との共生」「安心・安全な街づくり」「人づくり」という三つのカテゴリーで、さまざまな活動に取り組んでいます。しかしながら、「社会貢献」には、その言葉以上に深い意味があります。他者に与え、他者とつながり、他者を支える「社会貢献」は、その人自身に「幸福感」を生み出してくれるからです。この幸福感にあふれた状態、つまり「いきいきとした人生を送っている」状態をいかに創出し、発展させ、定着させていくかも、人的資本を強化するという課題の有力なツールのひとつだと考えられるのです。⁴

本書の読者はぜひ、フラガールたちのいきいきとした姿に注目してください。そしてそれに、どんなスピリットが影響を与えているのかも思いを馳せてみてください。

4 コラム2全体は、株式会社デンソー『会社案内』、同『統合報告書2020』に拠っている。また、本書「終章 未来の支え方」4. 彼女たちにできたこと」も参照のこと。

第1期から第2期へ

二〇一二年四月に始まったデンソーGフラガールの活動は充実したものでした。しかし半年、一年と時間が経過していくと、当然、メンバーたちの生活にも変化が起きます。あるメンバーは結婚し、相手の海外赴任を機に会社を辞めることになったため、活動が続けられなくなり、また他のあるメンバーは契約社員であるため、契約の満了による退職で活動から離れることになりました。その他にもさまざまな事情で、一人また一人とメンバーが少なくなっていました。一方、イベントやメディアでデンソーGフラガールの存在を知って、自分も活動に加わりたいという希望が多く寄せられるようになりました。

そこで、メンバー編成を改め、二〇一三年の秋から、二二名がデンソーGフラガール第2期生として活動をすることになりました。第1期生からの継続者が八名、新規加入者が一四名。ちょうどよい割合です。しかも第2期生は、活動内容や趣旨をすでによく理解しており、意欲十分です。充実した第2期になるだろうと、事務局も期待を寄せました。

また、この第2期以降、デンソーGフラガールは一年ごとにメンバーを入れ替えることになりました。

フラガールという、かけがえない場所

第2期生以降も、いろいろな個性が、さまざまな思いを胸に秘めて、デンソーGフラガールに集まりました。

たとえば、第2期生のいのっちさんです。彼女はフラダンス経験者ということもあり、第1期の募集時にも友人に参加を誘われていたそうです。しかし、東北支援のために何かしたいという気持ちはあったものの、自分の踊りは復興支援のために披露できるレベルではないから、と誘いを断っていました。しかし第1期生たちのステージを見て、

「踊りのレベルは問題ではない、想いを伝えようとするのが大事なんだ」

と気づき、第2期の募集に手をあげました。

応募の理由はそれだけではありません。

彼女は中途入社で同期の仲間がおらず、さらに女性の少ない技術開発職に就いていました。そのため、社内打ち合わせの仲間が欲しいという気持ちがあつたのです。

一方、フラガールは「女性だけの場」。昔のドラマや漫画で描写されていたような「いじめ」があつたらどうしようという不安もあつたそうです。しかしそれは杞憂に終わります。「誰かの役に立ちたい」と集まったデンソーGフラガールは、仲間に対する思いやりも並大抵ではなかったのです。

「こんなすばらしい仲間をもてるなんて、いい会社だな」

それが入会した当時の、彼女の偽らざる心境でした。その気持ちは、新しい支援の企画や仲間

への熱心な取り組みというかたちで、チームに還元されていくこととなります。

第3期生のヒロさんの場合はもう少し事情が複雑でした。彼女は派遣社員という立場や、職場が本社から車で三〇分ほどに位置する阿久比製作所だったこともあり、第1、2期のフラガールの活動を「東北支援とのつながりがわからない」「本社の正社員だけのきらきらした世界は自分と関係がない」と醒めた目で見ていたそうです。

しかし心の中は別でした。彼女も東日本大震災の被災者に支援をしたいが何もできない自分に忸怩たる思いを抱いていたのです。醒めた目はその裏返しでした。

心境の変化は構内のポスターを張り替えていた際に起こりました。そのポスターこそがフラガール第3期生の募集でした。思い切って事務局スタッフに連絡をとった彼女は、言葉を交わしているうちに「この人たちと何かをやってみたい」と感じ入り、募集に応じる決意を固めたのでした。しかし懸念はやはり人間関係。きらきらした世界でうまくやっていけるかどうかです。ところがこれも要らぬ心配でした。

「フラガール活動の時は職場やプライベートの時の自分とちがうんです。戸惑うくらい他人にやさしくなれちゃう。だけど群れているわけではなく、一人ひとりがしっかりと自分をもっている。フラガールはそういう場だったんです」

第4期生のみーしゃさんは、入社したその年にフラガールに加入しました。職場の人間関係の理想と現実のギャップに戸惑っていた時に、知り合いからフラガールの活動を紹介され、思い切って飛び込んだのです。

彼女ももちろん、東日本大震災を知っていました。自分も何かしなければというところざしはあったのですが、発生当時は大学受験を控えていたため、長年その思いを封印していたのです。

新しい人間関係を構築できると同時に、長年頭の片隅にあった支援活動にも参加できる。フラガールの活動は「一石二鳥」「渡りに舟」でした。初めて接したフラガールのメンバーには、彼女の理想の人間関係がありました。

「私はここで、みなさんと、東北の支援活動がしたい」

彼女はその時、強く思ったそうです。そしてその第一印象は活動中も変わらず、フラガールのチームはいつしか、彼女にとってかけがえのない存在になりました。

活動の場を広げる

メンバーの再編成に合わせて、活動内容も見直しを行いました。

何度も述べてきたように、デンソーGフラガールの活動は二つの約束を交わしていました。「フラダンスをけっして客寄せパンダにしない」、そして「社会貢献であることをしっかり伝える内容にする」です。

たとえ社長からの依頼であっても、これをゆるがせにしないことが活動の趣旨をブレさせず、結果として活動の健全な継続につながったことはすでに述べた通りです。

しかし一見、活動の趣旨とズレていそうに思えるけれど、判断に迷う案件というのがあります。それが福祉施設からの依頼でした。デンソーGフラガールの事務局がある社会貢献推進課は、日

頃から地元の福祉施設やNPO団体と接点があり、そこから声をかけていただいていたのです。フラダンスの音楽や踊りには、人を安心させたり、和ませたりする「いやし」の効果があります。またダンサーの華やかな様子は、老若男女を問わず多くの人をスマイルにします。だからこそその依頼だったのでしょうか。

前述したように、東北の復興という趣旨にそぐわないオフアワーは断っていました。しかしながら、東北の復興のために踊ることも、福祉施設のみなさんの笑顔のために踊ることも、「社会貢献」という大きな範疇では同じだと、割り切ることも可能でした。

活動の範囲を広げすぎると、グループは目標を見失いかねません。しかし。

原則をあくまで貫くか、それとも柔軟に対応すべきか。

ここは考えどころでした。

参考になったのは「仕入先総会」の方法でした。あくまで東北の復興支援という軸を外れず、そのための活動として施設を訪れるという条件であれば、依頼を引き受けるというやり方です。福祉施設のオフアワーに対しても、この方法で対応すればよいかもしれないと気づいたのでした。

最初にこのやり方を受け入れてくれたのは、地元刈谷市にある「老人ホーム あいおい刈谷」でした。ただ一方的にアピールするだけではありません。ここでも双方方向のコミュニケーションが大切です。あいおい刈谷でデンソーGフラガールは、フラダンスを披露するだけでなく、東北

応援ツアーで一緒だった「昼ボラ隊」が行っている、被災地の小学校へのベルマーク寄贈活動と相乗りのようなかたちをとることにしました。復興支援の呼びかけと併せて、ベルマークの収集と切り出しや回収、仕分け、点数数えなどを施設の入居者のみなさんとともに行って、復興支援をアピールしたのです。

ここでは思わぬ出来事がありました。

老人ホームの入居者と一緒にベルマークの点数を数えていると、入居者の一人が「自分も東北の人たちの力になれてうれしい」と言ってくれたのです。慰問も東北の復興支援になるのです。こんな効果があるとは思ってもみませんでした。やはり何事も、やってみなければわからないものです。こうして、第2期以降は、施設への慰問も欠かすことのできない活動のひとつとなりました。

こうしたイベント出演や慰問の際には、フラガールの出演意図に共感してくれたみなさんがすぐ行動に移せるよう、その会場で募金活動なども行うようにしました。出演時間以外は会場を練り歩き、寄付を募ったのです。

寄付先は福島県が運営管理する「東日本大震災ふくしまこども寄附金」⁵としました。こうした実践は、あの老人ホームの入居者がつぶやいたように、東北のことを気にかけるながらも自分では何をしてよいかわからず忸怩たる思いを抱えていた人たちにとって、善意を發揮するよい機会を提供することになったはず。それはフラガール活動に出合うまでの彼女たち自身の姿でもありました。メンバーたちは募金箱をもって歩く際に聞く「がんばってね」「ありがとう」という

5 「東日本大震災ふくしまこども寄附金」ウェブサイトより。

(<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/21055a/kifu.html>)

声や、何より思いがけないほど多く集まる募金に励まされました。

—— 最後まで悩んだ二つの案件

とはいえ、イベント等出演の可否をギリギリまで悩んだこともありました。

ひとつは二〇一六年四月に起きた熊本地震の支援です。熊本地震は東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）以上の揺れを記録。二七〇名以上が亡くなり、熊本城天守閣が大きく傾くなど九州全土に大きな被害をもたらした大災害でした。

すぐにメンバーの一人から、

「熊本のためにイベントを打ち、そこで踊りたい」

との提案がありました。

彼女は熊本出身だったので。

故郷の復興のために役立ちたいという気持ちは胸を打つものがありました。賛同するメンバーも多くいました。メンバーの多くは、フラガールの活動を機に社会貢献に対する高い意識をもつことができたのです。それは事務局としても喜ばしいことでした。被災者支援という面からもこの申し出に応えるという選択は可能でしたし、「フラダンスをけっして客寄せパンダにしない」「社会貢献であることをしっかりと伝える内容にする」という二つの約束もクリアできます。支障はないように思えました。

しかし、事務局はフラダンスによる支援活動はしないことに決定しました。

理由は、フラダンスによる支援が元々、福島県いわき市のスパリゾートハワイアンズから始まっていたからです。その点において、フラダンスによる支援活動は東北の人びとと共鳴することができません。しかし東北以外の人びとに向けてフラダンスを踊っても共感を得られるかどうか疑問だったのです。

むしろ対象が東北以外なら、フラダンスのかたちにとられない支援のほうがよいのではないかと。事務局はそう考え、フラガールではなく有志一同ということで募金などの支援を行うことにしました。

熊本出身のメンバーは、この決定をしっかりと受け止め、尊重してくれました。しかし実は、事務局スタッフは複雑な気持ちでした。仲間の誠意を汲み取り、実現させてあげることができなかったからです。この決定が正しかったのか否か。事務局では今でも思い悩むことがあります。正しかったと断言する自信はありません。

もうひとつは、二〇一八年に寄せられた地元で開催されるハワイアンイベントへの出演オファーです。通常、この種類の依頼はすべて断っていました。自分たちの目的はフラダンスの普及と伝承ではなく、東北の復興だったからです。

事前に理解してもらうために、オファーのあったイベントには「メッセージを伝えるために出演時間は最低二〇分必要」「東北の様子を紹介するため、映写できる環境の提供と機材の手配をしてほしい」「ステージを見た観客がすぐ実践できるよう募金や物販を行う」という条件を出していました。

高飛車ともとれる条件だったかもしれませんが、目的がちがうことを明確にしないと、フラダンス普及のために活動している他チームのみなさんにも失礼になると考えたのです。そして、ほとんどのイベントはこの条件で折り合いが付きませんでした。

しかしそのハワイアンイベントの主催者は、条件をすべて飲んでくれたのです。事前に活動趣旨を理解してくれたうえでの出演オファーだったのでした。

「それならばぜひ！」

事務局も一度は出演に前向きになりました。当時、デンソーGフラガールは成熟期に向かいつつあり、さらなるチャレンジが必要だと感じていたからです。

でもよく考えると、そのイベントがハワイとダンスと音楽に重心が置かれていることに変わりはありません。復興支援は付け足しなのです。

さらに一番問題だと感じたのは、どんなステージ構成にしても、フラダンスイベントにデンソーGフラガールが出演した事実が残るという点でした。これでは後々「あのイベントは出演したののうちにはダメなのか」と言われても反論できません。今後、ハワイアンイベントの出演は引き受けざるを得なくなるはずですよ。デンソーGフラガールのあり方も変わるでしょう。

これはひとつのイベントに留まらず、今後のデンソーGフラガールの方向性に大きく関与する問題だと思われました。そこで事務局は判断をメンバーに委ねました。メンバーたちがフラガールの存在意義についてより深く考えるよい機会であり、今後の活動がさらに意義深いものになると考えたからです。ただし重要な決定ですから、多数決ではなく全員一致を条件としました。も

ちろん方向を見誤るリスクは皆無ではありません。しかし結局のところ、事務局はメンバーたちを信頼していました。

メンバーはともよく考えてくれました。そして、ほとんどの人が出演に賛成を表明しました。ただし一人だけ「出るべきではない」と主張する人がいました。歴代フラガールたちが築いた伝統を破ってはいけないという理由でした。

その結果、事務局は出演を見送る決断をしました。多くのメンバーにとっては自分の判断とは逆の決定となりましたが、全員が納得してくれました。

この出来事は多くのことを事務局とメンバーに教えてくれました。自分たちで考えなければいけないこと、そのうえで互いの意見を尊重することの大切さ——。デンソーGフラガールの結束は、この出来事を経て、さらに強まったように思います。

周囲の協力

こうした活動にメンバーたちの努力が欠かせないのももちろんです。

しかし周囲の協力がなければ、何を為すこともできなかったでしょう。

たとえば、杉浦は事務局に一番近い人間として練習への顔出しやメンバーへの声掛け、人間関係でむずかしい問題が起きた時には、事務局スタッフの相談役として多大な貢献を果たしてくれました。

彼はフラガールのステージをあまり見ていません。いつもステージに背を向け、観客席に不審

な人物がいなか警戒を怠らなかつたからです。しかしステージを終えたメンバーからは、「杉浦さん、私たちのステージどうだった？」と感想を求められます。そんな時は「すばらしかったよ」と答えるのですが、嘘をついた罪の意識でその夜は眠れなかつたと振り返ります。そんな実直さが、多くのフラガールに慕われた要因でしょう。

二〇一三年から携わった松下は、ますます盛んになるフラガールの活動について、二つの懸念があったと言います。ひとつはフラガールの存在感が周囲に誤解を招く恐れがあるということです。これは杉浦や前任の岩田も懸念していたことでした。

もうひとつは仕事への支障です。練習や準備に忙しくて本業に差し障りが出るとは本末転倒です。またメンバーの所属する部署がフラガールの活動に不信感を抱くようなことも考えられます。そこで年に一度「ハートフルまつり」の前に、総務部から各所属部署へ報告書を送り、理解と応援をお願いしました。これが奏功したのか、フラガール活動はおおむね職場のみなさんから歓迎されていようです。

この他にも多くの社内関係者が、陰にひなたにフラガールの活動を支えてくれました。

—— チャリティ・フラ・イベントの自主開催

前章で、ハワイアンズのダンサーが当社を訪れた時、最前列の招待席で号泣したY・Tさんの話をしました。Y・Tさんとは復興支援でもつながりが生まれ、そこから事務局は被災者や避難されている方々に関する多くの情報入手するようになりました。

「愛知県被災者支援センター」を知ったのも、Y・Tさんの紹介です。

同センターは、東日本大震災により愛知県に避難してきた人たちと、その方々の一日も早い生活再建を願う愛知県の企業や個人との架け橋となることを目指したNPO法人です。事務局は同センターを通じ、愛知県内には一二〇〇人も避難された方々が暮らしていることを知りました（二〇一三年当時）。

メンバーはその多さに驚きました。

それまで被災者は遠い東北に存在しているだけだと思っていました。しかし自分たちのすぐ近くで暮らしていたのです。彼ら彼女らが感じている不自由さ、切なさ、そして故郷を思う気持ちを想像しただけで、胸が苦しくなりました。

「私たちにできることはなんだろうか？」

フラダンスで励ますこと以外ありません。

デンソーGフラガールたちは立ち上がりました。

自分たちだけでなく、前年につながりができたハワイアンズダンシングチームも招へいしよう。さらにはイベントの趣旨に賛同するフラダンス教室があれば協力をお願いして、復興支援の輪を広げていこう——。

構想はどんどん広がっていききました。

開催は二〇一四年五月一四日に決定しました。会場は刈谷市総合文化センターです。

社内の会場を使わなかったのは、このイベントをデンソー主催ではなく「デンソーGフラガール

ルによる自主開催」にしたかったからでした。二年弱の活動を通じて培った自分たちの力を試し、活動に対する思いをよりたしかなものにするのが目的でした。

自主運営になれば、メンバーだけが頼りです。そんな状況に身を置けば、さらにワンステップ上の責任感や使命感を醸成できるだろうという目論見もありました。

彼女たちは、企画を考え、設営から運営まですべてを自分たちだけで進めていきました。

企画のキーワードは「一二〇〇」。

もちろん、愛知に避難している人たちの数です。

メンバーからアイデアを募り、一二〇〇羽の折り鶴を折ることにしました。そしてその折り鶴で、ハワイアンズダンシングチームの、あの名曲のモチーフである「虹」を作り、その「虹鶴」を会場に飾ることにしました。折り鶴は自分たちだけで折るのではなく、なるべく多くの人と気持ちを分かち合えるように、メンバーが手分けして、いろいろな人に協力をお願いしました。たとえ小さなアクションでも、多くの人に東北復興の現状を



東北応援フラチャリティイベント in 刈谷 (2014.05.14)

知らせるチャンスにできるはずだという考えからでした。

当日は約三〇〇名の来場者、うち避難してきた方々は五〇名ほどでした。あの日のY・Tさんと同じように、フラダンスを見ながら、涙を流している方もいれば、「(東北のことを) 忘れないよ!」と感極まって声をあげる方もいらっしゃいました。

すべての演目が終わると、拍手がいつまでも鳴りやみませんでした。

デンソーGフラガールたちは別の充足感も感じていました。「先進」「信頼」「総智・総力」というデンソースピリットから出発した活動でしたが、そこからちょっとだけのみだして、自分たちの力を確かめることができましたからです。

2

驚きや感動を提供する工夫

期待を超えるために

日ごとに活動の場を広げていったデンソーGフラガール。しかし、活動の中心はやはり毎年開

催されている「ハートフルまつり」でした。

高校や大学の学園祭のように、デンソーGフラガールは七月の「ハートフルまつり」を目指して年間の活動スケジュールを組むようになりました。

観客の中には、毎年のフラダンスを楽しみにしてくれている人が大勢いらっしやいました。しかし練習時間が限られているので、おいそれとレパートリーの数は増やせません。

とはいえ、あきらめてしまうのは、ハワイアンズダンスシングチームの心意気にも、デンソースピリットにも適いません。そこで、毎年変わる「ハートフルまつり」のテーマに沿って、構成や見せ方を工夫して期待に応えたい、あわよくば期待を上回る喜びをみなさんに感じてほしいと考えました。

毎年ちがった嗜好を取り入れれば継続メンバーのマンネリも防げます。同時に、デンソーGフラガールの活動は、ダンスサークルやフラダンス教室とは異なり、単なる発表会ではなく、使命を帯びたアピールなのだとか確かめることができます。

毎年のテーマと内容は次の通りでした。

二〇一二年七月一日「東北」……愛知淑徳大学のフラサークル「Olu Olu」とのコラボレーション。初舞台で東北の復興を訴える（第1期）。

二〇一三年七月七日「応援」……デンソーのOB社員で結成したハワイアンバンド「マウイ・アイランダース」とのコラボレーションで、初の生バンドとの共演。ツアー等で知った

東北の現状を報告。東北報告は以降毎回続く（第1期）。

二〇一四年七月六日「ツナガル」……東北支援の活動中に知り合った支援者のみなさんとのコラボレーション。新曲「アイナふくしま」を初披露（第2期）。

二〇一五年七月五日「ともに生きる」……ハワイアンズの笑顔を全面にプリントした傘とともに「アイナふくしま」を歌う（第3期）。

二〇一六年七月三日「Hello! World」……新曲「花は咲く」を初披露。そして英語で合唱。ハンドモーションを会場全体で行う（第4期）。

二〇一七年九月二四日「こども未来館」……ハワイアンズのダンサーを招へいし、ダンサーによる子ども向けレッスン。大森梨江さん（東日本大震災当時のハワイアンズダンスシングチームリーダー、モアナ梨江さん、二〇一六年七月に引退）との対談（第5期）。

二〇一八年九月一六日「ココロひらく（多様性）」……歴代デンソーGフラガール集結（第6期）。二〇一九年九月二日「未来にチャレンジ」……観客をステージに上げて一緒に踊るパフォーマンス。ゲストが演奏する「糸」に合わせ、サビでステージと客席が一体になって簡単なハンドモーションを行うサブライズ企画を披露（第7期）。

ますます熱が入る練習

第2期、第3期と進むにつれ、観客のフラダンスを見る目も肥えてきます。

演目や演出を工夫するだけでなく、踊りそのもののレベルを向上させなければいけません。し

かも期が改まるたびに、半数近くのメンバーが入れ替わるので、向上はおろかレベルを維持するにも努力が必要でした。

フラダンスには「カヒコ」と「アウアナ」という二種類の踊りがあります。

カヒコは「古典的な」という意味で、神々にささげる神聖な踊りであり、踊り自体にもある程度以上の技術が求められます。一方、アウアナは「新しいスタイルの」または「ただよう」という意味の、比較的新しい踊りです。ウクレレやスチールギターのやさしい音色に合わせて、体全体や腰、手をゆらゆらとさせる優雅な踊りです。

普通の人たちが「これがフラダンスだ」と認識する踊りはほとんどがアウアナです。デンソーGフラガールもアウアナを踊っていました。

アウアナは、見ている人の気持ちをも、あたかもハワイでバカンスを楽しんでいるかのように、ゆったりと開放的にしてくれます。そのいやし効果とも呼ぶべき特徴が、福祉施設の人びとの心を捉え、イベントの華として求められ、さらには被災地復興の象徴として捉えられたのでしよう。しかし、第1章でも触れたように、踊っている本人たちは楽ではありません。

上半身は背筋の伸びたよい姿勢を常に保ち、下半身は中腰になってステップを踏みつつ、腕と腰は力を抜いてやわらかく揺らすのです。

体力はもちろん集中力が必要で、寒い時季でも数分踊っただけで汗をかくほどです。

初心者はこの動作を一通りおぼえ、次にフリ入れをし、さらに（これがもともと肝心なのですが）常にスマイルでいなければいけないのです。

これで終わりではありません。

ステージではレベルの差は関係なく、経験者も初心者も一緒に踊ります。群舞として、手の位置、顔の向き、ステップの幅、タイミングを揃えなければなりません。さらには曲中に踊り手が位置を移動するフォーメーション・プレーを取り入れ、年々複雑にしていきました。そしてまた、スマイル。

途中から加入した初心者メンバーは、相当苦労したはずですが、普通の習い事なら脱会者が大勢いても不思議ではありません。しかし実は、デンソーGフラガールは、「練習がきつい」「おぼえられない」という理由で脱会したメンバーを一人も出ませんでした。また幽霊部員もいませんでした。

参加者全員が、デンソーGフラガールの活動の意義をすでに理解していたことが理由の一番とされています。でも、それだけではありません。かつて同じ道を通った経験者たちが、初心者たちに対して、振付のアドバイスはもちろん、精神的にも支えていたことがとても大きかったのです。

第1、2期の頃、初心者は事務局スタッフから踊り方を学ぶパターンがほとんどでした。しかしそれでは事務局に負担をかけすぎだということで、経験者たちが自主的に初心者に教えていくようになったのです。踊りのレパトリーは限られているので、一通りおぼえてしまえば練習に顔を出す必要はないはずですが、しかし経験者たちは初心者のみんなに教えるために、あえて練習に参加しました。仕事やプライベートの都合で参加できないことが重なり、後ろめたい気持ち

になるほどの意識の高さでした。

練習場所は第1期から使っていた社内の「体力づくり教室」でした。ここでお昼休みに週二回、定時後に週一回の、合わせて週三回を定例練習の時間としていました。

「体力づくり教室」は鏡張りの部屋で、ダンスの練習には最適でしたが、空調設備が備えられておらず、夏は少し踊っただけで床に汗だまりができるほどで、熱中症対策が欠かせませんでした。ところが冬になると、底冷えがして靴下が欠かせず、それでも寒いのでコートを着たまま踊っていたこともしばしばでした（そういえば映画『フラガール』にも似たような描写がありましたね）。

また期が進むにつれて、グループ内で役割を設けるようになりました。企業内とはいえボランティアは「自主」が基本です。しかしながら、ともすると事務局に「おんぶにだっこ」ということになりかねません。そこで役割と担当者を明らかにして、自主的かつ円滑に活動を進めていくという工夫でした。

たとえば、役割には次のようなものがありました。

1. イベントリーダー……イベントでのメンバーの誘導・事務局サポート・ムードづくり
 - ① リハール内容のリマインド
 - ② ステージ設営サポートとリード
 - ③ 準備に手間取るメンバーのサポート

- ④ 控え室や舞台裏でのタイムキープ
 - ⑤ 直前でのメンバーの緊張ほぐしや声掛け
2. 練習リーダー……練習方法の検討・案内
 - ① 練習スケジュールの案内発信
 - ② 練習進捗確認とフォロー
 - ③ 練習方法の検討
 3. 広報担当……社内イントラネット（Dコネクション投稿ニュース）やSNSでのイベント告知・報告・活動PR
 - ① 投稿ニュース記事作成者選定・フォロー・投稿
 4. レイ担当……お客様への配布用レイ作成の検討と案内
 - ① 各イベントでの配布数検討（必要作成数の決定）
 - ② メッセージ内容の検討
 - ③ 作り方および作成依頼の展開
 5. ハンコ担当（詳細後述）……手ぬぐい販売の段取り検討と作成の案内
 - ① イベントでの販売検討
 - ② 「はんこ会」（手ぬぐい作成）の案内
 6. ムービー担当……一年間の活動記録動画作成
 - ① キーワード抽出・写真選定

② 動画作成

7. 体験コーナー担当……ステージ中のフラダンス体験コーナーでの振付説明
- ① 客層に合わせて「月の夜は」の振付をわかりやすくレクチャー
8. 東北スピーチ担当……ステージでの東北訪問報告
- ① 東北訪問報告記事作成
- ② イベントでのスピーチ

もちろん、結果には、担当者（リーダー）だけでなくメンバー全員が責任を負っていました。こうした体制の構築が、この活動を長く続けることができた要因のひとつとなりました。

しかし年中、根を詰めていたわけではありません。活動の中心は夏の「ハートフルまつり」。それが終わるとやはり気が緩み、練習の参加者も減って、秋から冬には毎回同じ顔ぶればかりが集まるようになります。ほぼ毎年起きる現象でした。

しかしそのたびにメンバーの一人から声があがります。

「ちょっと待って。みんな、これでいいの？ こんなことで、ちゃんと支援活動をやっていると胸を張れる？」

するとメンバー同士の話し合いがもたれ、最後にはかならず、次のステージを目指しがんばっていくことを誓いあうのです。

なぜここまで練習したのかというと、やはりスマイルのためでした。

踊りはむずかしい、全体で合わせるのはさらにむずかしい、そのうえ舞台の上は緊張の連続です。よほどしつかりとフリが入っていなければ、スマイルを浮かべる余裕なんて生まれません。その余裕を得るために、彼女たちは練習に励んだのでした。

そのスマイルはなんのため？

メッセージャーという自分たちの使命を果たすためです。

3

メッセージャーユニット

「昼ボラ隊」や女子陸上長距離部との連携

二〇一三年三月に、デンソーGフラガール有志は東北応援ツアー⁷を行いました。

同行した「昼ボラ隊」とは、その後も支援の協力関係が続けました。デンソーGフラガールが施設慰問やイベント出演に際して、ベルマーク収集活動をしていたのはその一環でした。

集めたベルマークは、寄贈する学校備品の購入にあてました。事前にヒヤリングし、できるだ

7 東北応援ツアーは2013年から2019年まで毎年計8回行われました。詳細についてはコラム3参照のこと。

けニーズに合ったものを選びます。たとえば、前述の校庭用大時計をはじめとする掲示板やカーブミラー、逆上がり補助器や大型扇風機、石油ストーブなどを東北三県（岩手県、宮城県、福島県）の小学校に寄贈することができました。

毎年一〜三校、ベルマークで一〇万〜二〇万点分です。福島県では、デンソーGフラガールとのつながりから、ハワイアンズがあるいわき市内の小学校が中心でした。

寄贈はなるべく関係者が現地に赴き、目録などを直接手渡すようにしました。

第一回の東北応援ツアーはこれを兼ねたものです。回を重ねるにつれ、訪問の際に学校関係者や児童から事前に聞き取りを行い、校舎の窓ふきや校庭の草むしり、廊下などの清掃等のボランティア活動を行うのが恒例になりました。

活動の後は児童たちとの触れ合いの時間です。

現在（二〇二一年）は問題ありませんが、東日本大震災直後は福島第一原子力発電所事故の影響で、学校の校庭などの利用が一時的に規制されたり、外遊びを敬遠したりする風潮が起きていたのです。当然、子どもたちの運動不足や肥満、さらにはメンタルヘルスへの悪影響が心配されていました。

そこで、デンソーの女子陸上長距離部（デンソーフリースローズ）のOGの協力を仰ぎ、ランニング教室を開催。子どもたちに体を動かす喜びと走る楽しさを思い出してもらえるようにと、学校側と事前に調整し実現したものでした。

しかし、こんな時にも元気をもらおうのほたいいてい支援する側です。寄贈先の学校を離れる際、

児童たちから「デンソーさん、ありがとう」と声を掛けられると、大きな褒美をもらったような気持ちになりました⁸。

参加者の一人は、その褒美を、このように報告しています。

「他の子たちと周回遅れになった男の子が居ました。息もあがつて苦しそうだし、さいごは一人になってしまおうし、もう十分がんばったからと思いき、最後の一周を残したところで並走していた社員が『ここでやめとく？』と声をかけました。彼は聞かれてすぐにキツパリと、『まだもう一周あります』と答えたそうです。最後まであきらめないよーと、声を掛けて応援していたのは私たちのはずです。遅れを取っても、苦しくなっても、ランニング教室に参加したすべての児童が一〇〇〇メートルを走り切りました。すべてのグループが走り終えるまで、みんなの応援が途切れることはありませんでした。子ども達は、あきらめない強さをすでに持っていました。全員のその姿に感動し、胸が熱くなります」

（二〇一六年ツアーに参加したヒロさんの「報告」から抜粋）

スタディツアーへの参加

東北応援ツアーは、こうした支援活動だけでなく「ボランティア研修」と名づけた学びの場を設けていました。東日本大震災の記憶を風化させないようにと現地で活動している「スタディツアー」のガイドのみなさんの協力のもとで、いろいろな地域を巡り、自分たちの目で、被災地の

現状や復興状況を確認する必要があります。

メンバーの多くがショックを感じたのは、やはり福島第一原子力発電所事故の影響で避難指示区域に指定された地域の光景でした。かつての人でにぎわった街は廃墟となり、立ち入りが禁じられていました。

「富岡町はゴーストタウンと呼ばれ、本来であればここは車が通って、誰かが会話し、子供たちが遊んでいるはずの場所。住民が大好きだったという桜並木が、誰も住んでいないこの町で枝を伸ばし、今年の開花を無事に終え、鳥も飛んでいました。木々や鳥たちが活動をしているのに、町はあの日から時がとまり、とても不自然で不気味でした」

(二〇一六年ツアーに参加したサキさんの「報告」から抜粋)

「最初に訪れたのが、双葉郡富岡町にある帰宅困難地域付近です。ここには有名な夜ノ森桜のトンネルがあります。『帰宅困難につき立ち入り禁止』と書かれた看板と柵が設置されており、そこから先は立ち入りが制限されています。……実は福島へ行く前に、震災直後から現在までの被災地の状況をメンバーで学ぶ勉強会があり、『帰宅困難地域には誰も住んでおらずとても静か』というのを事前に聞いていたので理解していたつもりでした。しかし現地に行くと、柵の向こうには普通の住宅街がある。けれど住人が一人もいないため音が無い。目の前の光景とあまりの静けさのギャップに驚きました。また同時に『ここ

に住んでいた人たちは、思い出さばいの家を、故郷を、ある日突然奪われたんだ。』と思う、胸がとても苦しくなりました。……フラガールに参加する前は、あまり被災地について考える機会がなく、『震災から八年も経ったから、元通りとは言わなくても大半は復興しているのではないか』と勝手に思っていました。しかし実際現地に行ってみて、震災の爪痕やまだ復興できていない場所を見て、自分の考えの甘さを痛感しました。しかし同時に自分が愛知で被災地のために何ができるだろうと真剣に考えることができる良いきっかけにもなりました」

(二〇一九年ツアーに参加したまつきーさんの「報告」から抜粋)

ガイドの方によると、こうした避難指示区域では、道路ひとつ隔てただけで、国からの補償額に差がある。それがもとで、本来なら励まし合わなければならぬはずの者同士が反目しあうようなトラブルが起きたと言います。またやむなく地元を離れた子どもたちはいわれの差別を受けたりすることがあったそうです。そして、避難指示が解除になっても故郷へ戻らない選択をした人が大勢いるという現実を、彼女たちは知りました。

こうした二次被害、三次被害のようなことも、遠くから応援しているだけではわからないことでした。

メンバーたちは想像を絶する現実に戸惑いながらも、「自分ならどういう気持ちになっただろう」「この課題を解決する方法はないだろうか」と考えたと言います。

「今回ガイドをしてくれた、ふたば未来学園の高校生、Mさん、Tくんが被災の体験を話してくれる間も、じりじりと日は照り、汗が吹き出し、梅雨の晴れ間の爽やかな青空が美しく広がっている。見回しても小学校の校舎は綺麗に整備され、ここで大きな地震の被害があったとは信じがたい。耳に入ってくる二人の体験は、ガソリンスタンドへ続く車の渋滞が長くて嫌だったとかガソリンを入れてきたと話すと盗まれそうになるから言えないとか、避難所は足も伸ばせずお風呂も三〜四日に一度しか入れず、食事は老人と子供だけに配られるためおばあちゃんが何度も家族のために並んでくれたとか、コッペパンとカップラーメンばかりの不摂生な生活で体重は急増したとか、いつお金が要るかわからないから使えないとか、彼らの実体験だからそのリアリティをもって迫ってきた。聞き取るのが必死なほどのスピードで二人の口から飛び出してくる。……愛すべき故郷が元の美しい姿を無くし、辛い避難生活でのいじめ。『お前は放射能で汚いからパスしない』とバスケチームで言われたこと。方言まで馬鹿にされたこともあった。……故郷に戻って来ない、来れない人に対してどう思うか？と問われて、Tくんは『故郷としてそこにあるということが大切なのであって、その人が戻るかどうかが大切なのではない。ここの良さを伝えていけば人は来るかもしれない。』と語る」

(二〇一八年ツアーに参加したディーナさん・ゆうこりんさんの「報告」から抜粋)

復興は年を追うごとに進んでいきます。しかし、人びとの記憶からは消えるものではありません

んし、消してはいけないものです。さらに一歩進んで、その記憶を後世の人びとの役に立てたいという人がいます。メンバーたちはそういう人たちの言葉に触れ、メッセージという自分たちの役割を再確認しました。

「夕方、宝来館の女将さんから震災時の津波の話を知りました。避難誘導をしていた女将さんは裏山へ逃げきれず、津波に飲まれてしまったそうです。その時の動画を見せていただきました。ものすごいスピードで迫る津波、目の前で津波にさらわれる女将さんの姿と『お母さん！ お母さん！』と叫ぶ娘さんの声に、私たちは声も出ないほどの衝撃を受けました。女将さんは流れてきた車に自力で這い上がり、助かったそうです。女将さんが私たちに話してくださった言葉の中に『自分の身を守れ』というものがありました。『津波でんでんこ』の教えそのものです。つらい経験をされた方が私たちに伝えてくださっていることを私たちは理解し、自分たちの教訓として生かし伝えていかなければならないと強く思いました」

(二〇一七年ツアーに参加したいのっちゃんさんの「報告」から抜粋)

「語り部の方のお話を聞きながら、『町民の気持ちになって』考えました。……『町民の気持ちになって』考えると、写真を撮る姿は、観光スポットを撮る様に捉えられてしまわないか？ 私達は、バス車中からそっと撮影させて頂き、黙祷をささげました。……フラ

ガールとして私達が出来る事を改めて考え、支援活動の見直しとなる、とても感慨深い研修となりました」

(二〇一七年ツアーに参加したまっちゃんさんの「報告」から抜粋)

しかし同時に、その記憶は本当に忘れてはいけないものなのか、忘れてしまおうべきなのかといった、当事者ですら判断がつかない問題があることも、メンバーは発見します。

たとえば、二〇一七年に岩手県上閉伊郡大槌町を訪れた時のことです。メンバーは「震災遺構に関する問題」をテーマにしたワークショップに参加しました。

大槌町は市街地全域が一〇メートルを超える巨大津波に襲われ、人口の一割近い一二八六名が亡くなりました。中でも町の中心近くにあった町役場では災害対応に当たっていた職員の一割に当たる四〇名が犠牲となりました。津波は三階建て庁舎の屋上まであつというまに達し、人びとを飲み込んだということです¹⁰。

その後、町役場は高台に再建され、大槌町復興の中心を担っています。いくら便利であつても海に近いエリアに重要な施設を置いてはいけないということが教訓として残ったからです。

問題は、壊れた旧庁舎をどうするか、でした。

この教訓を後世へ受け継ぐために保存すべきという意見と、思い出すのもつらい、一刻も早く解体してほしいという意見で町は二分されます。話し合いでは決着がつかず、町長選挙や裁判所を巻き込む大騒動となったのです。結局、旧庁舎は解体が決まり、二〇一九年に解体されました。

しかし、同じように多くの犠牲者を出しながら、震災遺構として保存が決まった石巻市大川小学校(現在、石巻市震災遺構大川小学校として一般公開されている)の例もあります。この施設では建物を残す理由を次のように説明しています。

「二〇一一年三月十一日の東日本大震災の津波により、大川小学校の児童・教職員八四名、大川地区全体で四一八名の方々が犠牲となりました。犠牲者の慰霊・追悼の場とするとともに、震災被害の事実や、学校における事前防災と避難の重要性を伝えていくことを目的に公開します」¹¹

どちらの判断が正しいかなど誰にもわかりません。しかし、大災害に遭うということはこのように二重三重の困難に見舞われることであり、そこにある人の心の動きもさまざまなのだとすることは、やはり実際に現場へ赴き、人びとと触れ合い、話を聞き、「ともに過ごさなければ」わからないことでした。

「ともに過ごす」「つらいつらいつら」

「ともに過ごす」といつても、それは時間や場所を共有する場合に限りません。

同じダンスを楽しむことも、「ともに過ごす」と言えるはずですが。

デンソーGフラガールにはフラがあります。

11 『石巻市震災遺構大川小学校』ウェブページ「施設の目的」より。
(<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/okawa/010/20210525140840.html#a1>)

10 岩手県大槌町『大槌町東日本大震災津波犠牲職員状況調査報告書』(2021年)。
(<https://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/438744.html>)

彼女たちは、二〇一六年の東北応援ツアーで初めて、東北で東北の人たちのために踊る機会を得ました。場所は福島県いわき市の「老人ホームいわかふるさとの楽園」です。単独の慰問ではなく、福島県立好間高等学校のフラダンス部「Ujiani Ojapa」（ウイラニ・オーラパ。ハワイ語で「明るく・陽気なダンサー」）のみなさんとの合同慰問でした。

「東北復興支援を目的に活動している私たちですが、東北で東北の方々の前で踊らせていただくのは実は今回が初めて！ 私たちの『東北の皆さんに笑顔を届けたい！』という想いもより一層強まります。震災当時や今回見た五年後の状況を思い出し、東北への想いを込めて踊りました。ステージは約一時間、デンソーの紹介を受けた私たちと高校生の「ウイラニ・オーラパ」のみなさんとで交互に踊りました。高校生が踊っている間、私たちも控室のふすまの隙間からそ〜っと覗かせていただいたのですが、高校生たちの踊りのしなやかさと表現力の高さにびっくり!! 彼女たちは、日頃から地域のイベントやボランティアで施設慰問をして、福島に笑顔を届けています。踊りから魂を感じ、とても感動しました。…：終った後に入居者の皆さまと、わずかですがお話する時間がありました。そのとき、涙を流しながら何度も『ありがとう、ありがとう』と言って握手を交わしてくださいました。思い出すと今でも胸が熱くなります。東北に行ってフラを踊る経験ができ、喜んでもらえて、本当によかったです。今回の慰問を通じて、私も元気をもらっただけでなく、踊りに対して見つめ直す機会にもなりました。最後に、高校生と『お互いがんばろ

うね!』と励まし合いました」

(二〇一六年ツアーに参加したゆいさんの「報告」から抜粋)

好間高等学校ウイラニ・オーラパとつながりができたのは、毎年五月に開催されている刈谷市の伝統行事「大名行列 奴のねり」に福島の高校生が参加しフラダンスを披露するという情報を、事務局が聞きつけたのがきっかけでした。

調べてみると、刈谷市に鎮座する市原稻荷神社の宮司が東北支援の活動に熱心で、いわき市の神社やイベントに参加していたウイラニ・オーラパに注目し、刈谷市の「大名行列 奴のねり」に招いたのだということでした。そこで縁を感じた事務局スタッフが、いわき市でのコラボレーションを打診したところ、快諾をいただきました。

好間高等学校ウイラニ・オーラパは、毎年八月にいわき市で開催されている全国高等学校フラ競技大会「フラガールズ甲子園」にも出場する実力校です。また前述したように慰問など様々な活動にも熱心に取り組んでいるとか。その彼女たちと活動をともにできたことはたいへんな励みとなりました。

また、フラガール活動のきっかけとなったハワイアンズへは何度も足を運び、ダンサーのみなさんとも交流を続けました。

「交流会で私がお話をさせていただいたのは、福島県出身のダンサーさん。震災があったの

は、中学卒業式当日。卒業式が終わって家に居たときに被災し、家は半壊で住めない状態ではなかったが、友達の家や海に近い方の家は全壊のところもあったそうです。そんな彼女がフラガールになったきっかけは、高校入学後フラダンス部に入り高齢者施設に慰問した際、おじいちゃんおばあちゃんたちが涙を流して楽しかったと喜んでくれた経験から同じように被災した人たちを少しでも笑顔にしたいという気持ちが強くなり高校卒業後、ハワイアンのフラガールになろうと思ったそうです。

彼女自身も被災しているのに、もっと大変な思いをした人たちに笑顔になってほしいと頑張っている姿をみて凄いなと感動しました。自分だったら出来ただろうか？と考えさせられました」

(二〇一九年ツアーに参加したゆつきーさんの「報告」から抜粋)

この頃になると、映画『がんばっぺ フラガール!』に登場していたハワイアンのダンサーのみなさんは多くが結婚等で退職し、次の世代のみなさんがトップダンサーとして活躍していました。若く頼もしい人材の登場は、復興の証しでもあります。フラガールたちはその事実だけでもうれしくなりました。

五分に込めたメッセージ

こうした東北応援ツアーや慰問活動などでの交流から得たさまざまな情報や、実体験から感じ

た事は、五分ほどのスピーチにまとめられ、イベントでのフラダンス披露の合間に発表することが恒例となりました。当初、スピーチ原稿は事務局が用意していましたが、期が進むにつれ、前述の「東北スピーチ担当」を中心にメンバーが練り上げるようになりました。例えば、二〇一八年のスピーチの内容は次のようなものでした。

「二〇一一年三月一日 一四時四六分 マグニチュード九・〇

震災による死者・行方不明者 一八、四三四人

震災発生時の避難者 四〇万人以上

二〇一八年三月一日時点での避難者数 約七三、〇〇〇人

皆さんは震災当時、何を思いましたか？

毎年訪れている富岡町。

当時は全域が帰宅困難区域で、立ち入りはできても滞在時間を制限されていました。

フラガールが初めてこの地を訪れたのは二〇一三年。

全く人の気配のない街、荒れ放題の田畑。

そんな富岡町ですが、毎年訪れるたびに立ち入り可能な範囲が少しずつ広がっています。

桜の観光名所である夜の森地区は長らく立ち入り禁止区域でしたが、

昨年ようやく三〇〇メートルの立ち入りが可能になりました。

そして今年、八年ぶりに桜まつりが開催されました。

住民は喜びだけでなく、当時を思い出す悲しみも交錯し、複雑な心境だったでしょう。

富岡駅周辺には、アパートや新しい家が増えました。

しかし、富岡に戻ってきた住民の方はわずかに二・九%です。

たかさんの新しい住居と、それに比例して増えていかない住民の数。

国から復興予算が下りるため、公営住宅は増えても、人は簡単には増えません。

この異様な光景はまるで、『富岡に戻ってきて』と願っているようでした。

また今回は、福島県立ふたば未来学園の学生が、被災した町を案内しながら、当時の記憶を語ってくれました。

当時小学生だった子も高校生になり、こうして語り部ボランティアをしています。彼らの経験談によって、胸が締め付けられました。

福島ナンバーの車は給油を断られる。給油がようやくできて燃料を盗まれる。

食事はインスタントラーメンとパンだけで体重が激増。

避難所では足を延ばして座ることも出来ず、入浴は三〜四日に一回で、イモ洗い状態。

配給が追い付かず、幼児とお年寄りから優先されるため、ずっと空腹。
外で遊ぶことも出来ず、何もやることが無い空虚な日々が続いたこと等。

こんな経験をした少女もいます。

バスケが好きな彼女は、都会の地に避難し、クラブチームに入りました。

チームメイトに『福島出身』と言った瞬間、返ってきた言葉は、

『お前、放射能の県じゃん。帰れ帰れ。福島の人には放射能で侵されているからパスしたら汚れる!』

彼女がパスをもらうことはありませんでした。そして思いました。

『なんで？なんで私だけがこんな目にあわなきゃいけないの?』

うまく都会になじめず、福島に帰りました。

それでも、前を向いて一生懸命生きている姿に私たちは心を打たれました。

『私たちにできること』

これはデンソーGフラガールが活動テーマとして掲げている言葉です。

私たちは道路を作ったり、建物を直したりなんてことはできません。

しかし、話を聞いて相手に寄り添い応援すること、話を伝えて仲間をたくさん作ること。

これはできません。

今回の訪問を通じて、多くの福島の方から、「愛知で応援してくれる、その気持ちが高い支えになっている。」という嬉しいお言葉をいただきました。

私たちデンソーGフラガールは、結成当時から想いを胸に、同じことが繰り返されないように、考えるきっかけを作り、伝え続けていきます。」

メンバーのみーしゃさんは、第6期の東北報告スピーチを担当しました。スピーチでは原稿を一度も見ません。すべて暗記したのです。原稿を読み上げるスタイルでは、東北のリアリティやフラガールの思いが観客に伝わらないという理由から、いつしか伝統となっていたやり方でした。顔を上げ、よどみなく、リアリティをもって語られる言葉の数々――。

みーしゃさんによると、このスピーチが始まると会場の空気が一変したと言います。涙を流す方もいたそうです。観客だけでなくメンバーの中にも。その真剣な表情を見るにつけ、彼女は「いろいろな意見はあるけれど、自分たちの活動はまちがっていない」と確信したということです。

こうした公式の場以外でも、フラガールの活動やツアーで得た知識や感動は、メンバーたちによって自主的に広められていきました。

たとえば、ある積極的なメンバーが自主的に職場で報告会を開催し、東北復興の現状を同僚た

ちに伝えるところを始めました。すると、その話を聞いた他のメンバーが自分の職場でも報告会を開くようになりました。フラガール以前には、そんな行動を起こすようなタイプではないと自他ともに認めていたメンバーもいましたが、デンソーGフラガールという集団は、そこに在籍する彼女たちの在り様まで変える力をもっていたのです。現場で彼女たちを見守り続けた杉浦は、こうした行動変容を「成長」と言い表しました。

言葉やダンス以外でもメッセージを伝える

東北応援ツアーで、被災地の状況を肌で感じ現地の人々と交流するにつれ、次第にフラダンス以外にもフラガールにできることがあるのではないかという意見が、メンバーたちから寄せられるようになりました。

そんな時に出合ったのが「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」です。

このプロジェクトは、福島県いわき市を拠点に、復興活動を進めるとともに、福島やいわきの未来ビジョンを市民が共有し街づくりを進めていく目的で結成された「いわきおてんとSUN企業組合」¹²が中心となって、二〇一二年にスタートしました。

東日本大震災とその後の風評被害、あるいは後継者不足により生産を断念した農家の遊休農地や耕作放棄地を有効活用するために、日本在来種の和綿を有機栽培し、収穫されたコットンを製品化、販売する一連の取り組みを通じて、地元の農業と繊維産業を活気づけ、新たな街づくりの原動力とすることが目的です。¹³

12 「いわきおてんとSUN企業組合」ウェブサイトより引用加筆。

<<http://www.iwaki-otentosun.jp/about/>>

13 「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」ウェブサイトより引用加筆。

<<http://www.iwaki-otentosun.jp/cotton/>>

メンバーたちはこの趣旨に賛同し、二〇一五年の東北応援ツアーにおいてコットン栽培体験を皮切りに、プロジェクトの支援を申し出ました。

支援の方法はなんといっても、このオーガニックコットンを材料にした製品を愛知県の人びとに購入してもらうことです。すでにある商品をイベント会場や訪問先で販売することも考えましたが、それだけでは販売促進につながりません。

そこで、メンバーであるいのっちさんの発案で、オーガニックコットンで作られた無地の手ぬぐいを購入し、デンソーGフラガールお手製の「消しゴムはんこ」を捺して、この世にひとつしかないオリジナル手ぬぐいとしてイベント会場で販売することにしました。

製作はフラダンスの練習日とは別日に「はんこ会」と称して集まり、手ぬぐいにはんこを捺しながら、ブースの設営方法や品揃え、PRの方法などを事前に打ち合わせました。

その甲斐あって、ブースでは「めずらしい」「おもしろい」と商品を手にとってくれる人が続出し、告知で知り、手ぬぐいを購入する目的で会場を訪れる人も現れたほどでした。イベント開始一時間で完売した時もあるなど、毎回大盛況となったのです。

メンバーにとつて、自分たちのオリジナルグッズが飛ぶように売れるなんてこんなにうれしいことはありません。買ったみなさんも喜んでくれたようです。

実は元々、「消しゴムはんこ」は、いのっちさんがプライベートな趣味として行っていたものです。趣味を活動に活かす喜び、さらに手ぬぐいメーカーやコットン生産者に利益になる、そして「東北の復興支援」を、多くの方々に知ってもらえる——商売の基本は「三方よし」な

どと言いますが、このプロジェクトへ参加した成果は、それ以上でした。

—— ツアーによってメンバーが得たこと

デンソーGフラガールにとつて、毎年行われる東北応援ツアーは欠かすことのできない重要な行事でした。事務局はツアーの企画運営は行いましたが、「行きたい」と手をあげたのはメンバーであり、旅費は参加者の自己負担でした。それでもメンバーのほとんどが参加し、参加後は「参加してよかった」と感じ、新しく入会してきたメンバーに「東北応援ツアーだけは絶対に行くべきだよ」と声をかけていました。

「岩手はとても遠いイメージでしたが、FDA（フジドリームエアラインズ。県営名古屋空港から東北へ定期便を運航している）を使えば一時間強で行くことができます。もちろん愛知にいてもできる支援もありますが、現地へ訪れることも支援のひとつです。海の幸も新巻鮭もとてもおいしかったので、ぜひ実際に岩手へ行って、味わってほしいです」

（二〇一七年ツアーに参加したゆかちんさんの「報告」から抜粋）

「福島県の新聞には毎日のように震災が原因で亡くなった方々の累計人数が掲載されています。六年たった今でも、その数は増え続けています。数字がカウントされるように、簡単に書かれているけどそこには、一人一人の死があるという事。重く受け止めないといけ

ないと思いました。復興は確実に進んでいます。その裏には、まだまだたくさんの方がいます。それでも皆は願っています。『五年後には以前のように皆でお花見が出来ますように……』復興への強い思いを感じました」

(二〇一七年ツアーに参加したあーちゃんさんの「報告」から抜粋)

このように東北応援ツアーは、デンソーGフラガールのメンバーに、ふだんの生活や被災地から遠い愛知県に留まっていたのでは学び得ない、深く考える機会と強い思いとを、もたらしてくれました。ご協力いただいたみなさんへの感謝の気持ちを込めて、計八回の詳細をここに記したいと思います。

第一回(二〇一三年三月一五～一七日)宮城県、福島県

被災地視察／宮城県石巻市立開北小学校においてベルマークによる寄贈品「大時計」

贈呈／スパリゾートハワイアンズダンシングチームへのインタビューと交流、募金贈呈

第二回(二〇一四年四月一八～二〇日)宮城県、福島県

被災地視察／浜風商店街での交流／宮城県石巻市立鹿妻小学校において寄贈品「掲示板」確認／スパリゾートハワイアンズダンシングチームとの交流、募金贈呈

第三回(二〇一五年四月一九～二〇日)福島県

被災地視察／浜風商店街での交流／いわき夏井ファームにてオーガニックコットンの苗

植え／福島県いわき市立藤原小学校において寄贈品「ワイヤレスアンプ」確認、ランニング教室、窓ふき／スパリゾートハワイアンズダンシングチームとの交流、募金贈呈

第四回(二〇一六年四月二三～二五日)福島県

被災地視察／浜風商店街での交流／福島県いわき市立長倉小学校において寄贈品「逆上がり補助器」確認、ランニング教室、草取り、窓ふき／老人ホームいわきふるさと
の楽園において福島県立好間高等学校フラダンス部「ウイラニ・オーラパ」との合同
慰問活動／スパリゾートハワイアンズダンシングチームとの交流、募金贈呈

第五回(二〇一七年四月九～一〇日)福島県

被災地視察／福島県いわき市立第一小学校において寄贈品「草刈機」確認、中庭の清掃／スパリゾートハワイアンズダンシングチームとの交流、募金贈呈

第六回(二〇一七年六月二三～二四日)岩手県

岩手県上閉伊郡大槌町、釜石市訪問／被災地視察／岩手県大槌町立大槌学園において
寄贈品「プリンター」等確認、ランニング教室、苗植え、清掃／安渡公民館において、
NPO法人つどい主催の地域活性化交流イベント運営協力、交流会参加、ステージ披露

第七回(二〇一八年六月二三～二四日)福島県

被災地視察(ふたば未来学園生徒によるガイド)／浜風きららにおいてオーガニック
コットン事業のワークショップと意見交換／スパリゾートハワイアンズダンシング
チームとの交流、募金贈呈

第八回（二〇一九年六月一六～一七日）福島県

被災地視察／東京電力廃炉資料館見学／双葉郡において畑作作業のボランティア活動
／スパリゾートハワイアンズダンスダンシングチームとの交流、募金贈呈

同時に、この東北応援ツアーによって、メンバーたちは、ある深刻なギャップを目の当たりにすることになります。それは他のボランティアや支援活動とも根を同じにするものでした。

『「いわきおてんとSUN企業組合」さんとの交流会。……今回はオーガニックコットンプロジェクトのY・Eさんにお話しを伺いました。……住民の方によっては『もう復興の時期じゃない。次のステップに進んでいる』と言われるそうです。でも次に何かあったときに思い出すためにも、震災というものがなかったものにされないためにも、活動を続けていくそうです。今後、活動のカタチは変わっても、スタートの気持ちは決して変わらないと。Y・Eさんの熱い想いを聞くことができました』

（二〇一八年ツアーに参加したゆいさん・いのっちゃん・みーしゃさんの「報告」から抜粋）

しかし、「二〇年間続けよう」という歴代メンバーたちの願いは、さまざまな要因も絡み、途切れてしまうことになります。

Column

3

デンソーグループ

東日本大震災 復興支援一〇年史

東日本大震災の支援は、デンソーグループ全体が一丸となって、さまざまな分野から東北支援に尽力するという、大規模かつ、初めて経験する活動になりました。

この貴重な経験とノウハウを、未来の人たちにも伝えることを目的として、東日本大震災から一〇年が経った二〇二二年二月に『デンソーグループ 東日本大震災 復興支援一〇年史』という三〇〇頁の冊子がまとめられました。

冊子ではまず、一〇年間の支援の歩みを時系列で「年表」につづっています。

次に、個々の支援をそのタイミングや内容によって「初動支援」「人的支援」「一〇年支援」に分け、デンソーグループが行った支援活動の全体がわかるようになっていきます。

本書で紹介した「デンソーフラガール」の活動は、「ベルマーク寄贈活動」や「東北応援ツアー」「ハートフルまつり」「かりや3・1」を忘れない、「はあとふる基金」などととも、「一〇年支援」のひとつとして紹介されています。フラガールが有志だけの活動ではなく、企業グループ全体が目指した「東日本復興」プロジェクトと密接につながっていたことを、読み取っていただけるはずです。

また冊子は、こうした支援活動が、ただ被災者のみなさんのためだけでなく、支援者にも多くの学びをもたらすのだという気づきに紙幅を割いています。

第4章

活動の転機と終焉

たとえば、デンソーでの仕事経験を活かした、ホヤの生産作業を効率化や仕組み化のアイデア提案で支える取り組みや、当時デンソーが量産していた車載用冷凍機の技術を応用した冷凍コンテナを、夏場の食品保管や水産事業の復興に使っていただいたこと。さらにはその冷凍コンテナを使って、被災した古文書の冷凍保存に用いたいと逆提案を受けたこと。これらの事例は、自分たちが業務で培ったノウハウや研究、製品が思わぬところで役に立ち、感謝されることを教えてくれたのです。

一〇年間の支援活動を通じ、ふだんの仕事で、自分自身やチーム、会社のためだけにあるのではなく、広く社会にも役立つことに気づいた社員は、たいへん多いのではないかと思います。

私たちの住む日本は、地震や津波だけでなく台風、豪雨、豪雪、洪水、土砂災害、火山災害など世界的に自然災害の発生する確率が非常に高い地域です¹⁴。本冊子にまとめられたような、企業としての経験、社員たちの体験は今後、このような災害に遭った人たちの支援に役立つはず。さらには、ともに支え、成長し合う社会づくりにとっても、貴重な記録となるでしょう。

14 内閣府『防災情報のページ』「災害を受けやすい日本の国土」〈<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h18/bousai2006/html/honmon/hm01010101.htm>〉

「アロハ」の意味

デンソーにデンソースピリットがあるように、ハワイには「アロハスピリット」があります。「アロハ」は、日本語の「こんにちは」みたいに挨拶に使う言葉として、たいへん耳馴染みのあるハワイ語です。

元々「アロハ」は「Alo」(アロ。顔や表面、存在という意味)と「ha」(ハ。呼吸)という言葉をつないだもの。挨拶の時に互いの額と鼻を合わせて鼻から大きく息を吸うことから生まれたと言われています。実はここから転じて、「愛」や「思いやり」「慈善」「敬意」など三〇以上の意味に広がっています。さらにはハワイの精神を象徴する言葉として重んじられるようになりました。現在ではハワイ州法で、その意味が定義づけられています。

「アロハスピリット」とは人々の心と精神の調和である。そしてアロハスピリットは人々を自分自身に立ち返らせる。人々は良い感情を考え、他者へ良い感情を表さねばならない」

ハワイ州法(第5上7項5)

さらには、「アロハ(ALOHA)」の一字一文字に、意味が込められているのだとされています。すなわち、

- A akahai: 思いやり、優しさ(優しさを持って感じ考える)
- L lokahi: 調和、ハーモニー(調和の中にしつかりと立つ)
- O 'olu'olu: 心地よさ(感情と共に思考のバランスをとる)
- H ha'aha'a: 謙虚さ(謙虚さを示し謙虚である)
- A ahonui: 忍耐強さ(自立を学ぶ忍耐強さを持つ)

これらは人と人との関係だけに当てはまるものではありません。人と自然との関係にも同じ態度が求められています。フラの音楽に、大地や花、風や雨に感謝し、喜びをささげる歌詞が多いのは、このアロハスピリットがハワイの人びとの根っこにあるからです。また世界中の人びとがハワイに憧れ惹きつけられるのも、ただ温暖な気候やエキゾチックな雰囲気だけでなく、このスピリットを感じているからなのでしょう。

東日本大震災の被災者が、ハワイアンスのフラダンスに涙を流すのも、単なる郷愁ではなく、そこにアロハスピリットを感じているからだと思えます。さらには、東日本大震災の被災地と、そこから遠く離れた愛知県のデンソーという会社をむすびつけたのが、アロハスピリットの象徴とも言えるフラダンスであったのも、偶然とは思えません¹⁵。

15 この項目の情報については、多くをハワイ州観光局公式ポータルサイト「allhawaii(オールハワイ)」に拠りました。<<https://www.allhawaii.jp/article/4409/>>

また、このアロハスピリットとデンソースピリット（コラム1 「デンソースピリットとは」を参照）とを引き比べてみてください。重なるところが多いと感じるのは思い込みでしょうか。たとえ思い込みであったとしても、工場と南国の踊り、理系と文系、理論と感情、だと思われたデンソーとフラダンスの文化が、こうして混じり合うことができた理由として、もともと「すてき」であることにまちがいないように思えます。

—— こだわりゆえに生じる溝

しかし、常にアロハスピリットを発揮するのはなかなかむずかしいものです。

「よい行いをしたい」「他人に寄り添いたい」「未来を輝かしたいものにしたいたい」と一人ひとりが真剣に考えるほど、こだわりは強くなり、意見は対立し、感情が乱されがちになるからです。

デンソーGフラガールの活動も例外ではありませんでした。

いや、デンソーGフラガールだからこそ起きた対立のようなものが多かったようです。デンソーは真面目な社員が多く、あいまいなままに放置しておけない気風があります。フラガール活動では結局、一人の「幽霊部員」も出なかつたほどなのです。

だからこそ感情が鋭く対立するケースも多々起きました。

第1章、第2章で述べたように、第1期のメンバーはゼロから三か月弱で初舞台をこなさなければならぬという困難に果敢に挑み、その後も試行錯誤を繰り返しながら、ともにデンソーGフラガールの基礎を築き上げていきました。活動を通じ、互いの考えを理解し集団として歩むべ

き方向を確かめ合っていたのです。

しかし第2期、第3期と進んでいくと、すでに「デンソーGフラガール」の活動は確立されています。メンバーがその活動を通じて期待することも変わっていききました。

たとえば、初期では「フラダンスを踊るだけでは復興支援にはつながらぬ」のだと強調し、フラガールのステージでは東北復興に関するスピーチや、動画の上映、メッセージ入りのレイの配布や募金活動へも力を注ぎました。とくに第1期の活動に共鳴して入会してきた第2期のメンバーは、支援のアイデアを次々と生み出すなど、その傾向が強くなりました。しかし次第に「自分たちはフラガールなのだから、踊りをメインに置き、その他の活動はプラスアルファでよいのではないか」という意見も出るようになりました。

同じチーム内といっても考えが多様であるように、個性も置かれた環境も多様です。

そうしたギャップを埋めようとしてリーダーシップをとり、逆にその強引さでメンバーの反感を買ってしまう人が現れたり、自分はフラガールの活動に多くの時間を割くことができずメンバーの足を引っ張ってしまうから、と活動から去っていくメンバーが現れたりもしました。

どちらもたいへん残念な出来事でした。

—— 痛感した、チームをマネジメントする力の必要性

こうしたトラブルの原因はほとんどが事務局にあったのだと考えます。

チームをマネジメントする力が不足していたのです。

せっかく確立したデンソーGフラガールの影響力を可能な限り引き出して、どんどん新たな支援活動に挑戦したい、それには積極的に関与してくれるメンバーを後押しし、みんなを引っ張っていったらおうと期待していたからです。

つまり事務局が、メンバーの二極化に加担してしまっていたのです。

ボランティアであれ何であれ、グループでの活動を意義あるものとするには、多少強引でもみんなを引っ張ることができる個性は必要不可欠です。しかし、メンバーそれぞれの事情をよく考慮に入れなければなりません。

ただし、事務局が露骨に介入すれば、今度はメンバーの自主精神が損なわれ、活動の意義がいまいになり、最悪の場合、活動そのものが自然消滅していくことも予想できました。何より自主でなければ社会貢献活動はその意味を失ってしまうのです。

この入り組んだ状況を打開するために事務局が行ったのは、コミュニケーションの機会を増やすことでした。メンバーの素直な思いや意見を丹念に集めたのです。すると、意見の食い違いは、理想と現実のギャップが原因であり、活動をよりよくしたいという願いはみんなが共有しているということがわかりました。これだけでほとんどの問題は解消しました。

次心がけたのは、東北復興に関する情報を、メンバーたちへ今まで以上に積極的に発信することでした。願いが共有できているのであれば、ギャップの原因は、各メンバーのもつ情報量の多寡による現状認識の差ではないか、と考えたのです。このころも、メンバー同士の誤解や齟齬を未然に防ぐ意味で、問題解決の助けになりました。

二つの対策とも即効性は期待できません。しかし根気強く続けていくと、やがてメンバー自身ができることに気づいてくれました。メンバーたち自身が、東北復興に関する情報を集め、みんなに広げてくれるようになったのです。先に述べたように、デンソーGフラガールのメンバーは、とても向上心が強く、人の支えになりたい、人生を充実したものにしたいという願望が強い人がほとんどだったので、対立も起きやすいですが、腹に落ちれば相互理解は早く、深いのです。

逆にこうした出来事が起きたことで、事務局をはじめメンバーたちはみんな、自分たちの活動を客観的に見つめる目をもつことができてきたと感じています。

人間関係を円滑に進めるのに大切なのは、「自分たちは何のために集まったのか」という「根」だったのです。それはデンソースピリットやアロハスピリット同様、「デンソーGフラガールスピリット」だと言い換えることもできました。

根本的な疑問

東日本大震災から七年八年と時を刻んでいくにつれ、今度は被災地側に変化が現れてきました。実は当時、愛知県では年を追うごとに東北復興をテーマにしたイベントが減っていました。フラガールたちも事務局も、それを災害の記憶が風化していると捉えていました。逆に活動にはいっそう熱が入りました。

しかしある時、東北応援ツアーで懇談したハワイアンズのダンサーの方から、

「ここで大きな震災や甚大な被害があったという事実は風化してはいけくないし、させてほしくない。でも、当時被災者が何を感じ、今どう思っているかは人それぞれであり、それを語り継ぐ必要はあまりないと思っっている」

と言われたのです。

それまでメンバーたちは、東北の被災地を訪れ、復興の状況を目に焼き付け、被災者のみなさんに寄り添い、その言葉に耳を傾け、自分の頭と心に刻み込み、そして、言葉とフラダンスでそれを愛知県の人たちに伝えることが、自分たちに課された責務だと考えていました。愛知県の人にも被災地の人にも、よい活動だと賞賛され、がんばってくださいと励まされていました。それ

が自分たちの「根」だと信じていたし、その実現のためだからこそ、練習やイベントにプライベートの時間を割くことも、仲間同士の考え方や感情の食いちがいも乗り越えられました。

正直に告白すると、この時も「ありがたい。うれしいです」と声を掛けられることを予想していたのです。ところが……。その後、事務局もメンバーも、そのハワイアンズのダンサーの方の言葉の意味について考えました。

そういうえば、オーガニックコットンプロジェクトのY・Eさんも、被災者から「もう復興の時期じゃない。次のステップに進んでいる」と言われたことがあると、話していたのを思い出ししました。いつまでも「被災者と支援者」ではないだろうというのです。

この時ばかりは深く考えざるを得ませんでした。東北の人たちの気持ちの変化に気づかなかつたのは、自分たちがいつのまにか「被災者に寄り添う」ことで自分たちの優越感を満足させるという、ボランティアが陥りがちな穴のようなものに、見事に落ちてしまったからではないだろうか。そうでないとしても、被災者側からは、何か弱者を憐れむような態度に見えていたのではないだろうか。

一〇〇%そうでないと言い切れる自信はありませんでした。

逆に、痛いところを突かれた――。

えぐってほしくないところを触られた――。

そんな気持ちでした。

しかし、それが原因ではありませんでした。

何事も時とともに移り変わるものなのです。

被災直後の支援活動はたしかに「ありがたい」だったでしょう。しかしある程度復興が進んでからの、被災地の人たちの「ありがたい」という言葉は、支援者のナイーブすぎる心をなぐさめる意味のほうが強かったのかもしれない。

それどころか、一日も早く復興を成し遂げ、被災者という立場から抜け出したいと粉骨砕身している人たちにとっては、「被災者のために！」という呼びかけは違和感しかなかったのかもしれない。

フラガールたちの脳裏には、二〇一七年に東北応援ツアーで訪れた岩手県大槌町の役場跡の光景が横切りました。

「そろそろ出口のことを考えなければいけないのではないか」。

出口をめぐって

今後の方向性を判断するには、自分たちだけで悩むのではなく、当事者の意見や捉え方を理解したうえで結論を出すのがまっとうなやり方だと思われました。幸いなことに、デンソーGフラガールには、長年の活動を通じて多くのみなさんとのつながりがありました。

話をお聞きしたのはY・Tさんです。二〇一三年にハワイアンズによる特別ステージを催した際に、観客席の最前列で号泣していたあの男性です。Y・Tさんは福島県いわき市から愛知県へ自主避難してきた一人です。故郷を離れた後ろめたさから立ち直り、愛知県で避難者の支援活動

に取り組んでいたのです。フラガールにとっては、被災者や避難者と、支援者の両方の立場を理解している貴重な存在でした。

彼も時間の経過とともに人びとの認識が変わってきたことを肌で感じていました。

たとえば福島から避難してきた子どもたちにとって、故郷は福島ではなく避難先の愛知です。一方大人たちはやはり故郷が恋しい。親子でも福島に対する認識が異なってきたのです。したがって支援活動に対する考えもひとつではありません。またフラガールと同じように、Y・Tさんにも自分を取り組む支援活動は自己満足にすぎないのではないかとという迷いがあります。

しかし、共通していることがありました。

それは東北や福島を元気にしたいという思いです。Y・Tさんは、さまざまな意見があるし、自分も悩むけれど、その一点をゆるがせにしなければよい。そうすれば自分と周波数が同じ人と出会うことができるから、その人たちとともに、願いを果たすために活動していけばいいと、自分の考えを話してくれました。

またY・Tさんは、東日本大震災を経験した者の目で見ると、愛知の人たちには災害に対する備えが足りないことに気づいたと言いました。

話し合いのあった一か月ほど前の二〇一八年七月、台風七号と梅雨前線の影響により発生した「平成三〇年七月豪雨」が、中部地方にも思わぬ被害をもたらしました。しかし、災害に備えていた者は、フラガールメンバーの中にもほとんどいなかったのです。東日本大震災という未曾有の自然災害の支援活動に携わり、そのメッセージを自負していたにもかかわらず、です。

Y・Tさんはそのことに触れて、東北の人間には被災という痛切な経験がある。この経験に蓋をするのではなく、逆に活かし、自然の脅威を忘れがちな人びとの防災意識を向上させるというやり方で、避難先に還元するという方法もある、というのです。

そういえば……。

メンバーたちはその一年前東北応援ツアーにガイド役として参加してくれた「ふたば未来学園」の生徒さんが、こんなことを言っていたのを思い出しました。

「私たちは、他の人たちに同じようなつらい目に遭ってほしくないのです」

だから、大人たちとちがいで、大規模に地域を復興させることはできないけれど、自分たちができることは、たとえそれが小さなことでも実践していくつもりだというのでした。それがツアーのガイド役や語り部としての活動の目的だったのです。

愛知県のある中部地方は、駿河湾沖が震源と想定される南海トラフ地震が発生する切迫性が高まっていると言われています¹⁶。その啓発活動をメインテーマにすることもできます。この指摘はその後の活動を考えるうえで大きな示唆となりました。

この他にも、あるメンバーからは、「東北の復興」というテーマはこのまま続けよう。そのうえで復興が進んでいることや、それゆえに生じた被災者と支援者の関係、支援のあり方に関する問題も、ありのままに伝えていこうという意見も出されました。被災者とひとくりにはできず、さまざまな意見や思いがあるのだから、自分たちはそれらを「受け止める力」を身に付け、できることを進めていこうという考えです。

しかし、どんな選択がよいのか、なかなか結論が出ませんでした。

3

新型コロナウイルス禍での活動と決断

緊急事態宣言下の決断

このような状況下、二〇一九年一二月に中国武漢で謎の伝染病が発生しているというニュースが流れます。伝染病は新型コロナウイルスによるものとわかりました。

またたくまに世界に広がり、二〇二〇年三月一日にWHOがパンデミックを宣言。日本では早くも二月に、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号でのクラスター発生、同月下旬には、政府によるスポーツや文化イベントの中止・延期要請、小中高等学校の臨時休校要請、三月には新型インフルエンザ等特別措置法が改正成立し、四月上旬には緊急事態宣言が発令されました¹⁷。日本に住む者全員が突如、外出もままならない事態となり、生活や仕事スタイルの変更を迫られたのです。

17 アジア・パシフィック・イニシアティブ『新型コロナ対応・民間臨時調査会調査・検証報告書』（ディスカヴァー・トゥエンティワン、2020年）より。

16 気象庁ウェブページ「南海地震とは」より。
(<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/nteq/tokaiq.html>)

フラダンスイベントどころの話ではありません。練習もミーティングもできない状態が長く続くようになりました。しかしいつでも再開できるように、四月下旬頃からウェブ会議サービス「Zoom」を使ってミーティングや練習を行うようになりました。このZoomを使ったコミュニケーションはとても好評で、

「コロナが収束したら、またがんばろうね」

メンバーたちはそう声を掛け合いました。しかし新型コロナウイルスは第一波、第二波、第三波……と収束する気配すら見せません。練習は続けましたが、メンバーはだんだんと「この練習が実を結ぶことがあるのだろうか」と不安がよぎるようになりました。

個人、あるいは趣味の集まりなら、災禍が過ぎ去るのを待つという手もあります。しかしデンソーGフラガールがデンソーの企業活動の一環である以上、目標設定や成果は不可欠です。しかしコロナ禍が収まる気配はない。このまま一年、二年と過ごすわけにはいきません。どこかで将来の見極めが必要です。

社会貢献推進課は、デンソーGフラガールの活動を第8期で終了させる方向で進めていくことを決定しました。「しかし……」と、杉浦を引き継ぎ、事務局スタッフの相談相手となっていた野田智文課長は、当手を振り返りこう述べます。

「スタッフは、会社の決定だから従えというのでなく、メンバー全員が納得するかたちで活動を終わらせる方法はないだろうか」と、ずいぶん悩んだようです」

それにはやっぱり本音での話し合いです。どんな時も、どんな困難も、フラガールは話し合いで乗り越えてきたからです。

メンバーたちは、さまざまな意見や思いを抱えていたことがわかりました。自主性を重要視した自分たちの活動も、やはり事務局のバックアップがあればこそ成立していたのだから、事務局が幕引きをしたいというなら従わざるを得ないという意見がありました。一方、10期まで続けるという目標を掲げ、ようやく八合目まで来たのだから、ここで止めるのは悔しいし、なんとか続けたいという意見もありました。

みんなが共有していたこともありました。

それは、フラガールが自分と大切な仲間たちの居場所であったことと、ボランティアや東北復興に関することはもちろん、立ち居振る舞いから他人への接し方まで日常生活の隅々にわたってフラガールの影響を受けていたのだということでした。そして、そういう場がなくなった時、自分はどうなるのだろうかという不安、そして寂しさでした。

しかし会社としての事情を説明し、繰り返し話し合いをもつことで、少しずつ意見が収れんしていきました。

そして最後は、みんなの意思で、活動の休止、を決定しました。

最後のステージ

しかし、このまま消滅してしまうのではあまりに寂しすぎます。

とくに図らずも最後の期となった第8期入会のメンバーは、二〇一九年一月に活動を開始し

た矢先の出来事です。衣装のサイズ合わせが終わり、練習をスタートしたばかり。慰問活動やフェスタ出演、東北応援ツアーなどの準備にとりかかろうとしていたその時だったのです。それが一転して、何も足跡を残すことができないとなれば、メンバーたちの落胆は計り知れません。そこで最後のフラダンス披露の機会として、オンラインで自分たちの想いを発信することになりました。毎年行われていた「ハートフルまつり」を「デンソーグループWebハートフルまつり」として、二〇二〇年一月から二〇二一年三月までウェブ上で開催されることが決まりました。¹⁸それにデンソーGフラガルも参加することにしたのです。

八年間の活動の集大成です。ウェブ上に流す動画は、全体構成や撮影、テキストの書き起こしや写真選定、編集のすべてをメンバーが行いました。そして約三か月を費やし、約一分間の予告動画と約七分間の本編動画が完成しました。

本編動画には、次のようなメッセージを流しました。¹⁹

「私たちデンソーGフラガルは、二〇一二年有志で結成され
東日本大震災を風化させないよう、想いを伝える活動をしています。

二〇一一・三・一一 東日本大震災
マグニチュード 九・〇

死者・行方不明者 一八、四二八人

尊い命が奪われ、当たり前前の日常が壊され
深い悲しみに包まれた日々が続きました。

福島県にあるスパリゾートハワイアンズ。

この施設もまた、震災で被害を受けました。

ハワイアンズのダンサーたちは、自身も被災しているにも関わらず、
何かをしなくてはという強い気持ちでフラダンスでの慰問を始めました。

彼女たちの胸には『苦しい思いをしている人たちの前で、
笑って踊ってよいのだろうか』という葛藤もあったそうです。

しかしフラダンスを見た人からは

『笑顔ありがとう。希望をありがとう』と声をかけられました。

彼女たちの気持ちは、笑顔を通じて見る人に届いていました。

18 https://www.youtube.com/channel/UC8cdJcaH_X4bl-i2Z8gmzAQ

19 <https://www.youtube.com/watch?v=cumP9zGcar0>

震災後、愛知にいたる私たちも何かをしなくてはと、もどかしいような気持ちでいました。

そんな中、ハワイアンズの皆さんの話を知り、私たちに出来ることとして、震災について伝えるフラダンスのステージを始めました。

現地で見たこと、聞いたこと、感じたことを語り、復興への想いを笑顔にのせてフラダンスを踊っています。

私たちの胸には複雑な気持ちもありました。

この活動は誰かに届いているだろうか？

この笑顔は東北に届いているだろうか？

【スパリゾートハワイアンズ元ダンシングチームリーダー 猪狩（大森）梨江さん】

デンソーGフラガールのみなさま、ご無沙汰しております。

スパリゾートハワイアンズの猪狩梨江です。

今年で震災一〇年目の節目を迎えますが、震災後はみなさまに

たくさんの応援、そしてみなさまの活動に大変勇気づけられました。

ありがとうございます。

今はコロナ禍のなかで大変な状況ですが、

またいつかみなさまに笑顔でお会い出来る日を楽しみにしております。

私たちにできること

傷ついた心に寄り添い

笑顔を届け

たくさんの仲間を作って助け合うこと

震災後ハワイアンズのみなさんで作った曲『アイナふくしま』

アイナとはハワイ語で『ふるさと』という意味です。

あたたかく迎えてくれるふるさとのように

終章

未来の支え方

私たちもあたたかい笑顔を届けられますように

ありがとうございました。

S p e c i a l T h a n k s ..

東北のみなさん

スパリゾートハワイアンズのみなさん

ステージスタッフのみなさん

フラガールサポーターのみなさん

動画は、第8期だけでなく、デンソーGフラガールに関わったすべてのメンバー、スタッフの想いが凝縮された作品となりました。

二〇二二年二月一日。この動画をYouTubeにアップして、デンソーGフラガールは八年間の活動に幕をおろしました。



Web ハートフルまつり 2020 (YouTube 動画のラストシーン)

彼女たち自身に残したもの

——一人ひとりから託されたメッセージ

当初、「フラダンスで東北を応援するなんてナンセンスだ」という声が多くありました。東北とは遠く離れた愛知県の、自動車部品メーカーが、なぜ縁もゆかりもないフラダンスなのか、というのです。応援や広報が支援につながるという考えも、理解されるまでには時間がかかりました。そんなことをしている暇があったら、募金なり復興ボランティアで現地入りするなりしたほうがよほどいいじゃないかというのです。

デンソーGフラガールがたった一度のイベントで終わっていれば、その見方は正しかったかもしれません。しかし結局、フラガールの活動は八年も続くことになりました。つまり、ナンセンスではなくちゃんと意味があり、その意味に共鳴する人、その意味を求める人が大勢いたのです。

そこへ至る道は困難の連続でした。事務局スタッフもメンバーたちも、人には言えない悩みと苦勞を抱えていたのです。それを乗り越えることができたのは、みな「人と人とのつながり」を大切にしていたからでした。

メンバー同士のつながり、東北の人たちとのつながり、愛知県の支援者とのつながり、社内のインフルエンサーとのつながり……。

デンソーGフラガールは危機を迎えるたびに、つながることの大切さを思い出し、社内外としっかりとつながることを心がけたのです。デンソーGフラガールは、東北を支援することを自分たちの使命として活動してきました。しかし、つながりは逆にフラガールたちを支え、成長させたのです。

たとえばメンバーたちは、活動を終了するにあたり、こんな声を寄せてくれました。

「数年前に大切な友人が亡くなり、少し気持ちが沈んでいたが、踊ることで前向きになれた」
(マナさん)

「二年で終わるのは名残惜しい。でも、復興支援に携われたこと、そして思い出に残るかたちで終わったのは良かった」
(ブラムさん)

「当初は一年で辞める予定だったが、每期良い出会いもあり辞められなかった。リフレッシュできる場だった」
(ゆうこりんさん)

「東日本大震災のことはあまり知らなかったし、知ろうとしなかったが、この活動を通じて向き合えたのは良かった」
(まつきーさん)

「祖母が病気で入院していた時に、病院で合唱団による慰問がありとても喜んでいました。それを見て、人の為に踊れたらいいなと自分もやりたい気持ちが高まった。最初に最後に

なってしまったが、老人ホーム慰問ができて本当に良かった」

(ナルさん)

「感情表現が苦手だった。デンソーGフラガールは、同じ志を持って集まったメンバーなので素直に感情を出すことが出来た」

(こつちゃんさん)

「色々なテーマでメンバーとよく話し合いをしたのが印象的。みんなで想いを共有し、それぞれ考えがちがうことにも気づくことができ良い機会だった」

(こゆきさん)

「仕事も結婚もフラガールが繋いだご縁で今があるので、これから恩返ししたい」(ヒロさん)

「フラガールは自然とお互いを尊重でき、久しぶりに会っても普通に話せる仲間。同志が繋がって嬉しい。同僚とはちがう仲間ができ、これは自分にとつての宝物」(いのつちさん)

「入社前にデンソーGフラガールの存在を知った。社会貢献している素敵な会社だなと思って入社したいと思った。実際にフラガールに入ってハートフルまつり等で家族にもとても良い会社だねと言ってもらえた」

(フアーリーさん)

「派遣で期の途中で退社してしまったが、フラガールは期の最後まで関わらせてもらえて嬉しかった。福島でもたくさんさんの経験や色々なことを知る機会を与えてもらい、みんなにも出会えた」

(ディーナさん)

「当初は「どうしたら想いを通じるのか？」と、何度も何度も話し合い、東日本復興支援を通して気が付けば、私達自身が成長する場になっていた」

(おじょうさん)

「なかなか練習に参加できなかったわたしに対して、たくさんの方がいろんなかたちで協力して教えてくれた。一年しか活動できなかったが、次もあれば絶対に続けていただろう」

なと思う」

(エミリーさん)

「この活動を通じて出会った全ての人が刺激と気づきと癒しを与えてくれた。復興支援したいとの思いで参加したが、実際には自分自身が一番与えてもらい成長させてもらった」

(ハニーさん)

「当初は、フラダンスに興味があつて始めたけれど、フラを通して自分だけが楽しむのではなく、見てくれるみんなも元気になったり楽しんでもくれたりするんだと実感した」

(ゆつきーさん)

「練習は真剣でなかなか笑顔を作れなかったけど、仲間の素敵な笑顔や観客の方の笑顔から自分も心から笑顔になれた」

(あけPさん)

「フラガールを通して老人ホームの慰問や実際に福島に行つてそこに住んでいる人たちの生の声を聞いたりする機会を得て、自分自身も笑顔がたくさんもらい、想いや笑顔を伝えたいと実感した」

(たまさん)

「みんな明るく、優しいので、自分も明るくなれた。みんなを照らせるチームだと思つ」

(ジャスミンさん)

デンソーGフラガールは東北の人たちを応援し、復興を願う活動でした。しかしメンバーたちのコメントを振り返ってみると、多くの人に応援され、支えられたことのほうが多かったことに、改めて気づかされます。

しかしすべてのボランティア活動は、突き詰めて考えれば「支え合い」です。そして、その支え合いこそが自己をも成長させるのです。

災害の多い日本にとって、今日の被災者は明日の支援者であり、今日の支援者は明日の被災者です。「支え合い」の意識をもち続けることができれば、今後も私たちは躊躇なく、支援活動を始め、そして終わらせることができるのではないのでしょうか。

ここで「終わらせること」にも触れたのは、そこまで考慮していないと、気軽に、楽しく実践することができないからです。

「できる人が、できる時に、できることをする」

これは、いつしかデンソーGフラガールの間で、自然に定着していった言葉です。

「支え合い」は特別なことでも、高尚なことでもありません。人生のあらゆる場面で必要となる人間の知恵です。そして社会貢献活動は、社会だけでなく、活動に参加した人自身をも豊かにしてくれます。メンバーが口をそろえて「参加してよかった」と答えてくれたのは、その証しです。さらに言うと、この「参加してよかった」という言葉は、運営にかかわったすべての人にとっても、この先、心の「支え」となるでしょう。

活動を受け継ぐ

このように、会社組織として運営するデンソーGフラガールの活動は終了しましたが、多くの財産を残しました。たとえば、メンバーの中に社会貢献活動に目覚めた者が多く生まれたこ

とです。

この思いの受け皿として、以前からデンソーGフラガールが参加していた「かりや3・11を忘れない」キャンペーン「ナイト」への出演を活動の中心とする、社員有志のチームが結成され再出発することが決定しました。

このイベントを選んだのは、愛知県から被災地を応援するというフラガールのスタイルを踏襲できること、また「NPO法人まちづくりかりや」という地域団体が主催し、デンソー社員有志で活動するデンソーグループハートフルフレンドの「かりや3・11を忘れないチーム」が協力するというしつかりした運営体制のもとであれば、メンバーは活動に集中でき、なおかつ自主活動として長く続けることができるだろうという観点からでした。イベントではフラダンスを披露するほか、東日本大震災からの復興を目的とした募金活動や、復興支援への行動を促すメッセージャーとしての役割も果たしていく予定です。



「かりや3.11を忘れない」で行う募金活動

また、フラダンスそのものへ高い興味関心を抱いたメンバーもいました。

彼女たちには、趣味や体力づくりの延長として「フラダンスサークル」を準備することにしました。年間を通じて活動し、インストラクターを招いてフラダンスのスキルを磨き、発表会などを開催することはもちろん、「デンソーGフラガール」を名乗ることはできませんが、慰問なども積極的に進めていくことになるでしょう。

これまでのデンソーGフラガールのソウルとスピリットは、新たな自主活動に受け継がれています。そしてその活動は、企業が運営の中心となっていた時代とはまたちがった、特色ある発展を遂げていくにちがいません。

さらにデンソーGフラガールの精神を受け継いだのは、メンバーだった彼女たちだけだったわけではありません。彼女たちと関わった社員や上司、その他多くのデンソーグループの社員がその好影響を受けました。

2

フラガールが企業に残したもの

——とことんやり抜いた活動に関われた喜び——社会貢献推進部署に残したもの①

デンソーGフラガールの発足以前から活動に関わり、発足後も事務局を陰から支えた杉浦は、大人数でありながら八年間も活動が継続できたことは驚きであると同時に、当初はわかりにくいという声が多かったにもかかわらず、事務局スタッフやフラガールメンバーの努力によって、いつの間にかデンソーの東北復興支援活動の柱のひとつに成長したことはたいへんうれしいと述べています。そして、

「元々、決めたらとことんやり抜くのが自分の信条でした。フラガールはとことんやり抜いた。そういう活動に携われたことは、自分としてもうれしいですね」と振り返りました。

——デンソーらしくないからこそ、デンソーらしさを——社会貢献推進部署に残したもの②

同じく発足当時に総務部長として関わった岩田は、フラガールの活動が継続できた理由のひとつとして、デンソーらしさをあげました。

デンソーでは社員教育において、常に「目的は何か」をはっきりさせるように指導しています。目的を明確にし、みんなで共有すれば、意見が食いちがっても最終的にはひとつにまとまるからです。当初、フラガールの活動にノーと答えたのは、その目的がはっきりとわからなかったという側面がありました。

「フラガールはデンソーらしくない。だからこそ、ブレてはいけなかったんです」

と岩田は言います。もし、岩田が感情や情性に流され、論理的な判断に従っていなかったら、フラガールも長くは続かなかったでしょう。

「しかし、当初の目的を守り、八年間続けるというのは並大抵ではありません。そこにはメンバーや事務局の人たちの努力があったのだと思います。よくやりましたよ」

さらに岩田は、フラガールの活動に接し、自分自身にも学びがあったと言います。

「東日本大震災の際は総務部長として、直後から物的支援、人的支援の活動に関わっていました。災害支援というと、こうした直接的な支援を思い浮かべます。しかしフラガールのような間接的な支援も喜んでいただけるのだという点は大きな発見でした」

—— 支え合うマインドの受け皿 —— 社会貢献推進部署に残したもの③

二〇一三年五月から二〇二〇年まで、岩田の後任としてフラガールの活動を見守ってきた松下は、直前まで海外拠点に赴任しており、フラガールはもちろん、デンソーの全社をあげた東北復興支援も直接経験していませんでした。

着任後に調べてみると、デンソーGフラガールが「デンソーグループにおける東北復興支援の象徴」だと気づいたと言います。しかし当時を知らないこともあり、実際の価値を測りかねていました。そんな折、デンソーGフラガールは、スパリゾートハワイアンズのみなさんから表敬訪問を受けます（二〇一三年）。松下も現場の責任者としてスピーチを任せられました。ところが……。

「私の後に福島県名古屋事務所の方がスピーチをし、それからダンスが披露されたんです。それ

らの切実さや真剣さに触れ、これはたいへん価値のあることだと理解したのです」

このことをきっかけに、松下は「積極的に貢献したい」と思いを新たにし、社内外へのPRや挨拶、メンバーへの激励などにさらに積極的に取り組むようになったということです。

またそれまで松下は、ボランティアとは一部の人が好きで行っているものだという先入観がありました。しかしフラガールの活動を見守るうちに、「誰かの役に立ちたい」という思いは多くの人が抱いており、受け皿さえあれば積極的に参加する人がいるのだということがわかったそうです。フラガール以降、社内ではフラガールを先例として、さまざまなボランティアグループが立ち上がりました。その点でも影響は大きかっただろう、ということです。

「デンソーは部品メーカーです。目に見えないところで、自動車などの完成品を支える部品の製造に精魂を傾けてきました。だから支え合う、助け合うというマインドが、元々育っていたのでしょう。その受け皿がデンソーGフラガールだったのではないでしょうか」

デンソー総務部から見た デンソーGフラガール

デンソーGフラガールは企業の社会貢献活動の一環として取り組んできたものです。したがって活動の終わりにあたっては、報告や決算を残す義務があるはずですが、

本書ではここまで、活動の発端から展開、そして終焉までを記し、その意義について述べてきました。以下の3、4では最後はそれらをまとめ、何を遺産（レガシー）とし、それをどのように活かしていくかについて考察しましょう。

考えたのは、現在、デンソーにおいて、社員の社会貢献活動を支える役割を担う総務部の、加藤晋也総務部長、斎藤功ソーシャルリレーション室長、野田智文社会貢献推進課長の三人です。三人はともに二〇二〇年に現在の役職に異動し、フラガール活動の最終盤を支えました。しかし社会貢献活動には不案内でした。そこでフラガール活動をモデルとして、これからのデンソーの社会貢献活動はどうあるべきかについて議論を重ね、以下のように、総務部としての見解をまとめました。

—— モノづくりのストーリー——デンソーGフラガールのレガシー①

デンソーGフラガールが残したレガシーは何でしょうか。

加藤は、それはまず「ストーリー」だと分析しました。

——ある社員が「こんなことがしたい」「これをすべきだ」と訴えた。それに対して上司は「やってみろ」と後押しした。一人の奮闘は次第に仲間を呼び集め、ひとつの大きなうねりとなり、あちらこちらに成果を残した。それだけでなく、八年も続けることができた——という成功譚です。

しかし、ただのサクセスストーリーに終わらないのは、成し遂げた場所が一人の思いがすぐに叶う単純な組織ではなく、デンソーグループという巨大で複雑な組織の中だったという点です。企業においては「思いつき」などすぐに高い壁にぶつかります。しかしそれにひるまず、誰もが納得できる目的を見出し、方法や効果まで考え抜き、実行に移していった。そして上司は、適切なアドバイスと支援によって、社員たちの希望を叶えることができるように導いた。また、困難に直面した時は最初に立てた約束に立ち返ることで、チームが道に迷うことを未然に防いだ。このストーリーは、ボランティア活動に留まらず、デンソーのモノづくりにも大いに参考になると思います。

参考にできるのはこれだけではありません。

彼女たちはまた常に「この活動は誰のためか」「目的は何か」を意識することで、自己満足に陥りやすい活動でありながら、絶妙なバランスを保ち続けました。デンソーは部品サプライヤー

です。お客様（メーカー各社）への供給責任を負っており、それを果たしていかなければなりません。こうした点もフラガール活動とデンソーのモノづくりが一致するところでです。

ただし見逃してはならないのは、どんなプロジェクトでも、ストーリーには描けない日常的な葛藤や挫折があったということです。平坦な道はひとつもなかったはずなのです。しかし、デンソーGフラガールの活動は、そういった葛藤や挫折に負けず最後までプロジェクトをやり遂げたという意味でも、レガシーとされるのに十分な資格をもっていきます。

—— 会社でなく社会の一員としての貢献——デンソーGフラガールのレガシー②

デンソーGフラガールはデンソーの企業活動の一環でした。でも、フラガールのメンバーたちはいつしか、会社の枠を越え、社会の中で活動しているという実感を得たといえます。その影響は、その後メンバーの多くが、フラガール以外、東北以外の社会貢献活動にも積極的に関わりはじめたことや、「他人にやさしくなった」といった日常生活での態度にも及びました。

今、企業とその社員には、社会の一員であることが要請されています。たとえば、世の中には、従来の視点では見落とされがちな、小さいけれど重要な課題がいたるところに存在します。その課題に気づき、解決のために会社が積み上げてきたスキルやノウハウを提供する。そんな「社会の一員としての貢献」が求められているのです。この要請に応えるには、会社、社員といった枠を飛び越えなければなりません。だが、これは簡単なことではありません。

しかしフラガールたちは、自分たちのミッションを達成しようとする過程で、自然に、その枠を越えることができました。しかもモノやお金でなく、人と人との交流によって実現した唯一の活動であったことが、その価値をなおさら高めています。これは当初、事務局が描いていた社会貢献活動の枠をはるかに超える成果であり、大きな発見でもあったと思います。

—— 「私たちにできること」への気づき——デンソーGフラガールのレガシー③

フラガールたちのキーワードは「私たちにできること」。そして「できる人が、できる時に、できることをする」でした。

災害発生の一報が届くと被災地に急行する災害ボランティアの活動はすばらしいものです。また現地で実際に汗をかいたり、多額の寄付をしたり、といった社会貢献活動も手放して賞賛すべきです。しかし、誰もができるといっわけではありません。善意や情熱、行動力の問題もあるかもしれません。ほとんどの人は「支えたい」「助けたい」という思いがあっても、仕事や家庭の事情、あるいは体調や能力、経済状態が足かせとなり、実践に移せないからです。

したがって、これらの活動は、自分とは遠い世界の出来事だと捉えられる時代が長く続きました。あるいはその裏返しとして「あんなものは暇と金がある人たちに任せておけばいいんだ」と反発心を抱く人の存在もまれではありませんでした。

しかし、フラガールの活動はそこに風穴を開けてくれました。趣味の延長でも誰かの役に立つことがある、現地から遠く離れていても応援の声は届く、ということを彼女たちの活動は気づかせてくれたのです。さらに、「できる人が、できる時に、できることをする」ためには、相互に

信頼し、尊重し合うマインドが不可欠だということも。結果的にこれらの気づきこそが、この活動が八年も継続できた一番の理由となりました。

このことは、ただ社会貢献活動だけに当てはまるのではなく、家族、会社、友人、地域との関係においても同じはずです。それならば、これらの気づきを得た人が増えていくと、社会はどう変わるでしょうか。

そう考えると、デンソーGフラガールの活動は、ひとつの社会実験だったと見ることもできるかもしれません。その結果は、本書の中で、メンバーたち自身が明らかにしています。

「デンソーGフラガールで、すばらしい仲間に出会えた」

「デンソーGフラガールでは、素直に感情表現ができた」

デンソーGフラガールでは、メンバーが背伸びをしたり、無理をしたり、あるいは無理をさせたりといったことがありませんでした。その人なりの「スマイル」、等身大の「情熱」は、大きな力に変えることができる――。この実験結果もデンソーGフラガールのレガシーです。

4

彼女たちにできたこと

「ボランティア」を使わず社会貢献を広げる

では、デンソーGフラガールのレガシーは今後、どのように活かされるべきでしょうか。

まずは社会貢献活動を一部の人の特別な活動ではなく、誰しもが普通にできる活動であると社員に認識してもらうためのよい参考になるといえます。

彼女たちは、これからの企業の社会貢献活動は、社員一人ひとりが自分の得意なことを活かし、社内だけでなく社外にも飛び出し、人びとをスマイルにしていくようなたちで進めていくべきであり、それが持続可能なスタイルであることを気づかせてくれました。

ここでは「ボランティア活動」という名称も不要かもしれません。

というのは、「ボランティア活動」という言葉は「清掃奉仕をするの？」とか「災害支援なんてたいていへんだね」などというように、人によって解釈の幅が広すぎるからです。またポジティブな捉え方ばかりではありません。前述のように、いまだに「ボランティアなんてお金と時間に余裕のある人がするものだ」という声がさまざまところから聞こえてきます。このような状態では、会社が「これからは社会貢献だ」と大号令をかけても、社員は渋々命令に従うだけでしょう。それでは何のための社会貢献活動なのかわかりません。

そこで、「ボランティア活動」という名称を用いず、もっと間口を広くとり、できるだけ多くの社員が、自然に、社会貢献活動に馴染むことを目指し、デンソー総務部ではさまざまな取り組みを開始しました。

「好き」が社会貢献になっていく

その中のひとつに同じ『好き』の仲間が集まって一〇〇日間話をする「一〇〇好き一〇〇日間トーク!」というプロジェクトがあります。たとえば、野球、映画、スイーツ、登山など趣味の分野で「好き」と思う人を社内掲示板などで募集し、最初の七〇日間はSNSなどで好きな分野について交流を深めます。そして最後の三〇日間だけ、どんなことでも構わないので社会貢献活動を行ってくださいという流れです。

初めて実施した二〇二〇年には約一〇チームができました。たとえば映画好きが集まったチームは、福祉施設を訪れて名作映画の上映会を開催したり、トークショーを開催したりしました。また登山好きのチームは、ゴミ袋を携えて山に登り、道中でごみを拾い集めるという活動を実施しました。

ポイントは「ボランティアっぽくない」ということです。「趣味を通じて集まった仲間の中で話が盛り上がり、ノリで社会貢献活動をやってみた」という軽い感覚です。しかし効果は決して軽くありません。野田によると、実施後にとったアンケートでは、「今まで趣味でやっていたことだけど、案外、世の中に役立つんですね」

「好きなことをやっているだけの時より、誰かに喜んでもらえる時のほうが、さらにうれしいのだということに気づきました」

といった声が多数寄せられたということです。

社会貢献活動の捉え方に、明らかな変化が見られたのです。

もうひとつ、ちがう例を紹介しましょう。

斎藤は以前、同じ総務部の別の室で防災を担当しており、東日本大震災の際には災害対策本部で物的、人的支援の最前線を支えています。その立場から、フラガールを見た時は「フラダンスで被災地を応援する」という発想が理解できなかつたと言います。さらにボランティア活動自体も、どこか偽善的でうさんくさいものと感じていました。しかしメンバーたちが自分たちで考え、行動し、作り上げていったことと、その熱意が周囲を巻き込んでいく様子を見るにつけ、考えを改めたそうです。

しかもそれだけでなく、思わぬ気づきが彼に訪れます。実は彼自身が、すでにボランティア活動を実践していたのです。

「以前からバスケットボールが好きで趣味にしていました。自分でプレーするだけでなく少年チームのコーチを引き受けたりしていたんです。もちろん無償です。ところがフラガールを見ていて、あれも社会貢献活動だと気づいたんです。楽しみのひとつとして行っていたので、そんな意味があるなんて夢にも思わなかつたですね。驚きました」

熱意は「好き」からもたらされます。いうなれば、「一〇〇好き一〇〇日間トーク!」プロ

プロジェクトは、この「好き」を点火プラグにして「社会貢献活動」という大きなエンジンを駆動させようというところみです。気軽で、身近で、一つひとつは小さな力ですが、多くの人が参加すれば、やがて大きなうねりを生む可能性があります。これらのプロジェクトはそのうねりを生み出すための第一歩です。

—— ウェルビーイングが指し示す「社会の未来形」

なぜ、デンソー総務部は、フラガールの活動にここまでこだわっているのでしょうか？ それは彼女たちの活動に、企業はもちろん、社会の未来形を見たからです。

デンソーの社員にはエンジニアが多く、一日の大半を会社で過ごし、研究開発に明け暮れています。「目前の納期をどう守るか」「コストダウンや生産性の目標をいかに達成するか」のために日常の幸せを犠牲にすることもいとわれない、真面目で誠実な社員が数多く存在します。彼らにとっては仕事こそが社会貢献の唯一の道でした。

しかし、社員は本当にそこに幸せを実感していたのでしょうか。

社員の幸せを犠牲にして、企業が豊かになるのでしょうか。

社会はそんなことを企業に求めているのでしょうか。

このような問題意識が近年、デンソー内で高まってきました。そこでデンソーは、自動車だけではなく、環境や安全、安心といった社会課題を解決する企業を目指ようになりました。視線を会社ではなく社会に向けたのです。企業が変わるには社員が変わらなければなりません。しか

し前述したように、社員の目線はなかなか変わりません。熱心な社員もいましたが一部にすぎず、多くの社員が共有するには至っていませんでした。そんな時、ひとつの解答を提示してくれたのが、デンソーGフラガールだったのです。

こうした流れを受けて、今、デンソー総務部の目指すところを一言で述べるなら「ウェルビーイング」(well-being)です。

ウェルビーイングとは「単に疾病や障がいがないことではなく、身体的、精神的、社会的に良好な状態」を指します²⁰。人が幸福を感じるには、お金や成果だけでなく、人生や生活全般について肯定的な感情や評価が必要だという考えです。

社会貢献活動は、他人の役に立つことによる充実感や、社内外との縦横無尽なつながりを強め、結果として本人の幸福感を高めていきます。そしてデンソーGフラガールが起こしたように、幸福感を保持した一人は、本人だけでなく周囲の人たちも幸せにしていきます。ということは、このように幸福な社員を増やしていけば、会社もおのずと幸福な状態を達成するはずなのです。

そしてそれは、日々の生活や仕事から発展させることもできます。すでに私たちはそのところろみ始めています。例をあげましょう。

地域にはさまざまな課題があります。たとえば、設立間もないNPO団体などには、プロジェクトなどを着実に進めていくノウハウがありません。一方、デンソーには長年の技術開発の経験から、社内に、仕事の進め方や会議のまとめ方、議論の「見える化」といったノウハウが蓄積さ

20 子安増生他編『有斐閣 現代心理学辞典』(有斐閣、2021) 50頁より引用。定義は、WHO (World Health Organization)(1993). Doctor-patient interaction and communication. WHO. による。

れています。社内でも当たり前のことでも社外では意外に役立つ、ということがあるのです。そこで、このノウハウを伝えることのできる人材を、社内公募して派遣するといった取り組みを始めています。それが「デンソープロボノプログラム」です。

また東日本大震災で全社をあげて支援活動を展開した経験を活かし、自然災害が発生した際に、被災者のニーズを把握して、日本全国から集まってくる災害ボランティアをマッチングする、災害ボランティアセンターの運営をサポートする「災害ボランティアコーディネーター」の育成にも力を入れています。

前述の趣味や「好き」はもちろん、仕事で得た技術やノウハウといった分野でも、「私たちにできること」を他者に提供し、喜んでもらえることでウェルビーイングが高まるのです。この考えのもとに、みんなが行動して、互いに支え合う会社を実現し、引いてはそれが社会全体に広がっていくとしたら――。

これが、デンソー総務部の考える社会の未来形です。

―― 続けるために発揮される「デンソーのつゆ」

ただし、これらの活動も続けなければ意味がありません。

そこで発揮されるのが「デンソーらしさ」です。

デンソーらしさの一つに「何事もこだわる」「とことんやる」という精神があります。

創立以来のモノづくりの精神から生まれたこの「デンソーらしさ」は、本書で取り上げたデン

ソーGフラガールをはじめとする東日本大震災への支援活動、社員が自主的にボランティア活動を行う「デンソーグループハートフルフレンド」、アジアの障がい児を取り巻く社会課題に一九九九年から取り組んでいる「アジア車いす交流センター」(WAFCA: Wheelchairs and Friendship Center of Asia)の支援活動、小学校の理科授業支援のために技術者による出前講座を実施するデンソーサイエンススクール(二〇一一年開始)などの活動が、年を経ても衰えず逆になります熱心に取り組まれ、信頼を勝ち得ていることで、すでに証明されています。

また、企業内での持続可能な支援活動を追求していった結果、①支援を一方通行ではなく双方向にする必要がある、②支援活動と仕事とが両立できるかたちにしなければならない、③限定的活動から開かれた活動にする、などの課題を解決するために、支援活動を収益化し、個人やボランティアという立場での支援の限界を超えた支援を行うことを目的とした「ライフビジョン」(自治体と住民をつなぐ情報サービスアプリの提供)や「宝の山プロジェクト」(森林保全の課題にモビリティ技術を応用する)といった活動も始まっています。これら二つはいずれも有志によるボランティア活動が発端となっており、デンソーらしさが、それを会社外の社会にまで広げていった好例と言えるでしょう。そして実は、これらのプロジェクトチームの中に、数名の元フラガールが名を連ねています。

―― まだ見ぬ豊かな未来へ

しかし、収益化やビジネス化は手段にすぎません。

目的は、あくまで社員のウェルビーイングの達成です。

そして社員一人ひとりが、その幸福感を社内と社外とに広げていくことで、社会全体をよりよい方向へ導き、それとともにデンソーグループが育っていく。その成長が再び、社員個人のウェルビーイングにつながる。そんな夢のような循環が、実現可能なのだということを示してくれた。それがまさしくデンソーGフラガールの「レガシー」なのだと思います。多くの人の意志と行動と、幸福とを巻き込んで、社外にまで広がっていったこの活動は、それ自体がピリオドを打った後も、まだ見ぬ豊かな未来を指し示してくれています。

次はみなさんが、小さくて大きな、一歩目を刻む番です。

フラガール!

～ 東北への想いを形～

キャラバン

since 2012

東日本大震災の発生から一一年がすぎました。十分ではないとはいえ、東北の復興は少しずつ進んでいるようです。デンソーグループフラガールは解散しました。しかし、東北のみなさんが未曾有の災害を乗り越え、希望を失わず、力強く生きる姿は、私たちの生き方に多大な影響を与えてくれました。そのことに感謝すると同時に、震災で亡くなられた方々のご冥福と、いまださまざまな後遺症で苦しむみなさんの、一日も早いご快復をお祈りいたします。デンソーグループフラガールのソウルとスピリットとは、今も、東北のみなさんとともにあります。

デンソーグループフラガール一同

1 期



ハートフルまつり
2012
(2012.07.01)



デバイス製造 1 部運動会
～デバイスの元気を東北に届けよう～
(2012.07.22)



夢卵
(2012.11.04)



仕入先総会 (2013.05.26)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|-----------|------------|----------|-----------|-----------|
| 梶
泰枝 | 加古
倫子 | 影山
はづき | 小浜
明日香 | 大友
恵子 | 大沢
幸代 | 大海
留美 | 梅津
晶子 | 内堀
明子 | 打越
菜津 | 入野
敦子 | 今井
賀央里 | 井上
真奈美 | 井上
朋美 | 井野
裕子 | 稲垣
遥 | 伊藤
早希 | 井土
宏美 | 市川
久美子 | 石原
由紀子 | 石郷岡
ゆみこ | 安藤
愛 | 赤井
結衣 | |
| 花澤
美香子 | 畑中
陽子 | 西林
菜美 | 新美
美由起 | 成田
ゆか | 名倉
礼 | 土井
啓子 | 寺尾
由紀江 | 玉山
智恵美 | 谷田
恵美李 | 田中
絵里香 | 武野
玲奈 | 鈴木
真莉亜 | 鈴木
久美子 | 神野
恵子 | 白井
瑛里 | 近藤
鮎香 | 小室
友紀 | 小林
由佳 | 黒柳
美紀 | 川島
梨乃 | 川島
佑理 | 神谷
佐智子 | 加藤
真智子 |
| 渡会
佳代子 | 米山
琴美 | 米田
和代 | 郁
辰 | 山根
奈美 | 倭
依梨名 | 山田
美里 | 山田
雅代 | 山口
泉 | 森田
紘子 | 森
綾乃 | 本江
あけみ | 持田
千景 | 村瀬
有紀 | 宮崎
吹子 | 宮崎
久美子 | 松山
史奈 | 松本
可奈 | 前原
祐子 | 前川
恵美 | 深田
麻里 | 平野
有紗 | 林
恵 | 馬場
小雪 |

デンソー G フラガールメンバー一覧

デンソーグループフラガールが残した8年の足跡

2022年3月11日 初版発行

著者 株式会社デンソー
総務部 ソーシャルリレーション室 社会貢献推進課

発行所 株式会社 三恵社
〒462-0056 愛知県名古屋市中丸町2-24-1
TEL 052-915-5211 FAX 052-915-5019
URL <https://www.sankeisha.com>

本書を無断で複写・複製することを禁じます。乱丁・落丁の場合はお取替えいたします。
©2022 DENSO CORPORATION

2期

ハートフルまつり
2014
(2014.07.06)



東北応援フラチャリティイベント in 刈谷
1,200羽の虹鶴
(2014.05.14)



東北応援フラチャリティイベント in 刈谷
(2014.05.14)

東北応援ツアー
浜風商店街
(2014.04.19)



東北応援ツアー ハワイアンズで
(2013.03.16)



東北応援ツアー
石巻市被災地視察
(2013.03.15)

ハートフルまつり 2013
(2013.07.07)



ハワイアンズによる表敬訪問 (2013.08.08)

3期

ハートフルまつり
2015
(2015.07.05)



ハートフルまつり 2015
(2015.07.05)



東北応援ツアー
オーガニックコットン畑の土づくり
@ 夏井ファーム
(2015.03.19)



江南市民文化会 (2015.03.08)



アースデイいわき (2014.03.22)



組合元気倍増イベント
募金活動
(2014.06.06)



岡崎平和学園慰問 (2014.11.09)



刈谷豊田総合病院慰問 (2014.06.21)

4期



ハートフルまつり
2016
(2016.07.03)



かりや 3.11 を忘れない
(2016.03.11)



東北応援ツアー
スタディツアー
(2016.04.24)



東北屋台村 (2016.07.18)



ヘルニア学会学術集会
(2015.05.21)



阿久比ふれあいフェスタ
(2015.10.04)



高棚フェスタ
(2015.09.12)



豊橋フェスタ おらんと〜まつり (2015.06.06)

5期



ハートフルまつり
2017
(2017.09.24)



岩手ボランティア研修
安渡公民館はあとふる交流会
(2017.07.08)



あいおい刈谷慰問
(2017.02.05)



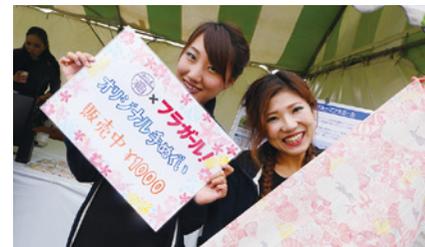
東北応援ツアー 小学校での中庭清掃ボランティア (2017.04.09)



あいち小児保健医療総合センター
慰問 (2015.12.13)



あいおい刈谷慰問
(2016.02.13)



DAISHIN フェスタ
手ぬぐい販売
(2016.10.09)



オールトヨタビッグホリデイ (2016.10.23)

6期



ハートフルまつり
2018
(2018.09.16)



手話サークル全社イベント
(2018.04.08)



東北応援ツアー
ふたば未来学園の生徒による
スタディツアー
(2018.06.23)



東北応援ツアー
オーガニックコットンワークショップ
(2018.06.23)



ハートフルまつり 2017
東北 PR ブース出展
(2017.09.24)



ユニオンカーニバル
(2017.05.21)



ハートフルまつり 2017
ハワイアンズ大森さんとの対談
(2017.09.24)



ココロハコブプロジェクト (2017.11.12)

7期



ハートフルまつり
2019
(2019.09.22)



3.11 プレ社内イベント
(2019.03.06)



東日本復興支援企画画展キャラバン (大安)
東北ツアースピーチ
(2019.08.21)



東北応援ツアー 双葉郡の交流畑での軽作業 (2019.06.17)



幸田さわやかホリデー
(2018.09.23)



岡崎平和学園慰問
(2018.08.05)



あいおい刈谷慰問
(2018.02.18)



ココロハコブプロジェクト (2018.10.07)

8期

博愛ナーシングヴィラ
慰問
(2020.02.02)



博愛ナーシングヴィラ
慰問
(2020.02.02)



博愛ナーシングヴィラ
慰問
(2020.02.02)



博愛ナーシングヴィラ慰問 (2020.02.02)



西尾わくわくホリデー
レイサーサービス
(2019.09.09)



西尾わくわくホリデー
フラレクチャー
(2019.09.09)



西尾わくわくホリデー
(2019.09.09)



ココロハコブプロジェクト (2019.11.24)



Webハートフルまつり 2020



Webハートフルまつり 2020
(動画撮影風景)



Webハートフルまつり 2020 (動画撮影風景)



Webハートフルまつり 2020 (動画撮影風景)